靈元院御集　完

へ 4
4691

桃葉篇

春

歳中立春

長閑しれあかとうきにつれ日数をもふ立春よりとへ待なゝ

當渡る日数もまへつゝわするれ年波たちはるや立年

年のうちハ松の音をや花とらんふかき代の春もまた先

わかものゝかしはおへは年の内よまつ毎ちきれふの子春

どしれ内より日数をかきよ来春くる待へてもしるき春ハ来たり

春毎にうつや衣も白妙の雪きの冬路も猶をへさてぬ

歳暮立春

年の内よのまかとつきる日数をも待あへぬ春やまちわびつらん

立春

てはえきさいまの光のまり春よあけれけとめつり

男山つゝ（じく）音の霞立こへて行のかり春に立かへるら年

されみのなりかゝて有日は思尽ぬるは春は年かわり

昭和十六年三月五日寄
石澤介吉氏贈

門 へ 4
號 4691
巻

のとけさを君か世のためしにとるやまのひかりにまさる春をまちえん
山のはの光りもそへてのとけさは世を守るの春にしるかり
うす氷打とけぬらし春来ぬと君か代のはしめとふてふ春の朝かな
さゝなみも霞の袖にうらゝかに春をつけせる朝ほらけかな

立春日

日のひかりやはらけて光るをかの名の木のまにも春やきにけり

立春風

春きぬとふきくる風に花のかをさそひてや風のさむさ
ふきわたる春のかせに山かせにのこる雪のきえもやらす
佐保姫の袖やさすらんのとかにも春の風の寒さ

立春霞

来る浦の霞かすめる沖津浪千鳥なけて春やきつらん

立春暁

あくる夜の空にかすみて立つる年は今日をまちのとかさ

立春朝

あくる日の光のとけき君か代の神代もかはらぬ春やきぬらん
朝日かけひきのふの雪もけさははれて君か世の春や立らん

なきさくかけふの山の霞を春の雪もかひきの山の桜の春に成けり

関立春

なにはつのかけあふみの関守も春とやあふさかの山のかすみにけり

立春氷

うち水のあきらかにはれて春もかすみの関とやまひん

都立春

氷とけし岩もる水のとけきに春たつ庭の池の

元日

名にしおふ春のみやこの花のおもかけに春や立らん
一とせのかはりつる夜に春をまつ心はしらて春まつ年
ことしせの明るも春のみちはなほ春たちにけり

元日宴

一とせのはしめてくるに名たかきのつきはなる春の初なりけり
梅の花の節にあふはるの庭に名たかきやせりて君にむかふ人

春立明

年もしらぬ木のふの春のあけぼのに春やたつらん
きのふとは春のあしたの年たちて山の端に霞みそめる
ともしつらむ霞のたちて山のはの空を見わたせはそふる
春立明や霞にしら雪の人待えたる春にのこるのきのしら雪

春色従東到

あつまよりいつる日影にさそはれてまつあつまより春は来にけり
春にとしあらぬ人もしるしそと初日をまちて霞たちけり

雪中春来

木の芽はる春はきにけり雪のうちに初花の春やまつらん
うちわたす野へは雪にてまだきえぬ里は春をもまつらん

貴賤迎春

たかきいやしき花のこころもへたてぬ春やきぬらん

野沢帖迎春

春の野の沢辺に出る若菜つむ袖の雪ふる春は来にけり

春到管絃中

管絃の音舟人乃色詳に春の江の世の中に家の類に鶏鳴

初春

風にとくる汀の氷のとけそめて春たちかへるけさの水

わかれしやとしのはしめの世は春の花

花鳥ともに春をまちけり

松の枝のみとりそふ霞や春をとふらん

神垣の春の光りのいやまさる

初春山

君かよはいくとせしけるみのこ白みのけてをやむのとのかすみ

ふるさともたなひく神の初春に

松の色も霞のうちに初春の

吹風のをと春も花をまつ初風

初春風

吹風の音も空にも春の初風

吹風をさそふ春ののとけき

言の葉の花にさきそふ春の初風

冬枯の木のめも春の初風

生るとや春の初風

春の色に都の春の初風

氷とく池の汀の初風の

初春霞

春霞の初雲にたなひくや霞

尾のうへの山のさくらやまちかねて春のうちに深山へ

神垣のわたりのまゆのゝとけさや雲神く床の世の初春

春は先のとりもうつふ水鳥もものゝ川島や霞そめけん

春といへハ雲はまつさえて長閑さをいとゝ霞やなきさ立ふ

春も猶さきは数の色めつとまつ雲のりに立のほるらん

おりえて春立秋の嶺のきみかさしに花やせくあるらん

長閑もとまふふらんいつ出ても春そ見えハつまねつまみか

まつさそる霞の袖にまた春やきこ初花とあもとさきし山ふ

初春雪

春といへ日もなほぬて雪ふもの雪のあるかふてよのちと見え

うる春の夜はたるの雪は花数をふふつのわとのひきえ

立そしるきのふ霞をそつて雪ふもくりはさの白川書

春わさと霞いそしにうつゝれて又ありいつるさき雪ふこの花

初春山

霞こつ山をとこのしるさそりや春のゝうなるころを知る

おとこ山河の水春のろゐとハ長閑なる世の光なるらん

霞こむ霞のみとりまの花の山のころを知らん

長閑なる春を都のみのをふりそけハるくるとそすつ

長閑なる南の山のおとさきと二笠風春かゝる春風

春きえしものまひやるにさき文書を霞を守れ山のえ

初春海

あせらひる春代そしめし石んせやゝ南山ハ霞ハ浦さき

とうしあんそまさいくはそも波の雪のまた海る春の初春

うらまた数ハのきえし長閑なる春のちまさの雪き霞に

都初春

うらまさ波都のさの初春や花りしたくの世とも長閑き

大内えの葉なかるそふらや数の神宮の春ハえ南ん

初春氷

石清水にはりとまさよの春んまそてかを世をとれの浪も色まき

たつこれも春ふ見ゆきいかりゆき日れかふあこかりたそれて

ゆるく風のさゝ浪池のこほりとけて春とはいへとさむくなりとてかくれ

初春氷

いまの世のとけ初ぬらんけさは池とはいけの氷をとかしむる初春

なへて世に吹初ても神風の吹なへ川に通ひ初らん

初春待花

待かたき花や吹白へ百草や風ものとけき春の行かな

初春梅

木の下に袖に春風の初花とこの神垣に句ふ梅つゝも

初春松

千歳にあひて今朝汲みし神垣のまつや一枝の春やあらん

住吉やみとりもわかなみの春は海への中川のつしほ

春となる世のほかはあらしの春の色ある松の風や吉ん

初春鶯

春きてさき鶯の家はとや打ちとけ初る初音なるらん

うらやまも春のまんやわか心の初音やけふの鳴声

初春の鶴

氷とふ池の心に住つるのちとせのとけさ見えてその声

初春衣

春の衣をたち重ねつゝかさねても立ち一ぬるきの袖さきそ

初春祝儀

早春

天の下いつも今年に春しられ神代のまゝに春そ来にけん

けふよりもむかしのことも住吉や神代の春は沖つ白浪

和哥の浦に今ぞ一しほ松の緑ありける春の色も見え

いつる日の光かゝやく山に立春と霞の末

今年の春も一夜の松の上にかゝり春を迎ふにけり

霞立て年とりにける松の尾のみとり初る春の一しほ

わかなの山つもりといつくの春か野の日数かそへし

世にふりてのとかなれや春の来るやうに光神さふらん

紫の雲のたなひく春あらはせし今もその色とまらん

立そむる春のみとりにかゝる谷の雪もあつめし

あら玉の年も春の山の端に霞たちそめて春はあり

も朔そや今日しも明津風いつ吹へとめて春をつけん

のどかなるをれいろに吹なすや柳かれの木のめ春風
花とみし入江の波のをはなる春くる風の吹よせて

早春風

松風の声ものどかく八幡山ちかききらめきの春を告て
吹かへて花とこそ見ゆ冬枯の梢やいつくる木のめはるさめ
ものさめの世によわみやきて治まる人のこころの春の初風
稲荷山ま白をのこさぬ風のそれ春霞の梢もまちきこえん
大原や雲かかりおろす山風も袖のうちにそ霞むらん
長閑さはたつ花のひかりの春秋へて待えておれぬ春の初風

早春雲

峯はまたまたかしく寒そし朝日影色くもりてまちはえたまへん
うち霞きこえ春くるへて神路山まよひぬるもやかよふの花

早春霞

立そむる霞やかくせ木の葉にほしのひりの春を告らて
山の端くたなびきてのかかる春の名残の霞やへだててのこらぬ
海山のいざ近づくのまれん朝日影らかりのうちに春はれにけり
立かれぬ朝日のかげりの霞にもまつ出るの春はさかへなり
雪消ぬる嶋のうす緑白うすに霞のたなびくかかる
山の端のえて消のそれの雪の余春かきみれて霞出初
男山にはめくるを今はりや南ふく風に色めいし

早春雪

めいだくもし花くもまちけりて何方の春はつま庭梅の若
咲もふるまでいまれて桜ちる春かかせれる花初花

早春畑

初春の芝生のさき霞この空のをきや籬戌つまり
山のそれ雪もとくかれて朝日影のまくに白ふ春のいろかれ
みゆきふる山ものまへで入日まで先いまたきてまなやつむらし

早春山

やりつみえく世の初たるは春しふたの庭に山
春日にはも名都ふ山ふりそえしえしがみゆつる鶯の声

山中春

関中春

関路中春

早春氷

垂りふかくなりてや長閑なるらむ春風の松の庭訓
のとかなる日かけに此木のもと春の色山もとめに立霞とあつ
知らよの日も江向ふ山かけの峯は霞そ立そ春なく
時志らぬ富士の高根に霞ひく棹や春を寸らん
み山やゝこの雪もしたゝる雪も春をえさん
こゝ路とゝ春をも通ふ名もしかし世の波もふれ給も
佐保姫の心やひらきて春や春立る霞を見らん
関守も明ぬと春を知らは浪の山より出や立らん
行かふ人もとめぬ関もうち霞たへぬ春に逢坂の山
君は今の春や見えぬと明そむ雲居の空にかゝる霞
打出ても春をしる関の山もしはや立のほりつ
初春の汀に池の氷の薄くさへさるゝ氷は寸るささら浪

早春氷

早春河

河早春

早春海

早春浦

浦早春

都早春

早春鶯

池の面はまたさえ残る冬の氷に春をまつ浪
岩間よと若菜の水をきえぬ今日春の青柳の春の川辺に
山かけの氷やとけて春になるともはや若菜をつみて河の波
ある山の霞をわけて出ぬ布引の滝や水の春を見えすらし
名におふ浪の海辺の霞の光やつゝむ春やみえまし
春来ぬと霞をしたふ田子の浦の波やさしひきてきぬは春
春かすみたなひく浦の夕なきや浪のよるさや霞わかし
神代より春風の猶さえて立ちかへし住吉の松
立かへる都の春にやかへて神をつゝむ代の諸人
いとえやと鶯まちそむ九重に春をつけてうくひす哉
鶯と千世のしらへ春やきく九重の春の虫 沖の
八雲立出雲の世の長閑さおほえすや都の春を鳴鶯

早春梅
子日松
早春柳
氷始解

梅はなかずまたれて咲ぬいまだ花のこ夜ふらくひすぞ鳴
き流れ終年春たちそめて鶯の声えつる声ぞのどけき
鶯のなく声さへ松の色もまた[illegible]千世の春ぞ先かん
初春のけふ梅のえだに[illegible]めづるや千世の初の子に
すゞしき花をまづしるき夜の[illegible]ちぎる千世のはつ春
引くまつは千世の初ねの今日よりぞ千世の初とて
谷川の氷ぞとけし谷の戸に氷のとけてふくすゞや
吹わたる氷のうへに今朝よりぞまたれるかぜの氷解る風
やむきをとけしとはいへ[illegible]水にて池のさゞ波
けさの朝の氷とけつる春風のわたるとさわぐ池のさゞ浪
うすごほりとけて流るゝ汀かなわかもえ出る池のは春風
と絶えしうすきやなぎの糸のさゞ波池の春をまつらん

□□氷の
氷解
春川氷解
雪消氷又釋
子日
正朝子日
朝子日
小子日

物思ひ川をもたりてもとる春にとくる氷のうちとけてゆく
きのふまでとぢし氷に鶯の氷をとけてぬるぬ池の花
氷のうへ流れてきちとる鴨の羽のそよぐを見る沢水の春風
細氷とくる春日に流るらめ岸は波にうつる雪きえに
いく千世をさねて子の日の松にむすびなばひとの上の春
これぞ又神をまもらん春日野の子日のいはふ千世まつの初子日
あらたまの歳つもりて又けふの春のはじめの初子日
子日して子を千代まつる春の日は松にゆるせ子の日せん
子日して老をしらぬ千世の松を植へてこそ春の日なきぞ
千代の千世にかけて松の千世の千世をとどめて春をもとむ
小松原ひきつけてこそ千世の子日とをまつ世の春を祝
いづれの尾の山の根も住んでやまず代をこえてひとつある子日なる

野子日

むかしありし子日にあそふ行幸せしためしもけふさらに野にそ

社頭子日

千世のためにひきそへて子の日の松の尾上に見し御祖の神垣の春

子日松

ちよをふる松を子日のためしにやこの野へのへの春にひくらん

萬代とかさねん数を春日野の小松か枝にちきりてたえぬ

引うゑしわか子日の二葉よりしける積まし千世の生末

かきりなき千代の春をも引そへて松の枝にそ子日の春

身にみてる緑は松の二葉より千世をかさねて子日の春

子日宴

野へにいてて春の霞をくむ袖もちとせの初子をいはふまとゐ哉

子日侍宴

小松引おもふまとゐをかさねて御の子日に遊ふなり

本院七十賀の時屏風正月松原に小松原子日したる所

たれ引子日のまつの種野へ出しいく千世をちかひそかせん

卯杖

初春のいはひの杖やこの人の千世をつくへきためしなるらん

霞

春霞たちそめてける袂よりつもれはなにはの千世の春の色

峯の雲わか雲部の外への道をみちさへつかんとてこぬ

世にあまねく霞の袖にわたるらしわか君の春の恵なるらん

いつの年も春たちそめて明の世光待らる霞なるらん

霞知春

この山の名をたえぬ春日野やまさに霞の色にみゆらん

松の尾の山のこまかに緑より先見ゆる千世の春の初空

おほよそに春たちそめて花ものわきもせしぬ霞とそみる

霞始聳

長閑なる空のけしきにたなひくや春の霞は立ひそむらん

佐保姫の春めてつや吹かゝるめくみに霞をあまやかす高山

雁かへる見えまるの春のあさほらけ峯たちすめる

春きぬと日をさるる年ありしくもる夜や霞そめし

明石とる春とかへりにたちそめて消もされぬ朝霞の色

霞添春色
長閑なるまゝの霞の色にぞ山もみどりの色まさりけり
けさ春の野山の鳥の声の内におきそめて見えしは春の横雲

暁霞
山の端の春もさぞなや今はまさるらん霞わのかゝる明ほの一夜
朝日の影もまだ出でぬ山の尾上よりたなびく霞の春のくれ方

曙霞
峯たかく霞ていづる春の日の光さやかに見えて霞ぬく
明ほのゝ花にすみて見る山の端や暮てもつゞく霞ならん

落暮霞
浦近く立る霞や浦風を吹さる網の見ゆる長閑
暮ぬとて帰るさの浦の霞がくれのこなる山もやく

山霞
行き人をしるべの霞の色に立ちて山の端の色ゆく
霞のる山はその麓のうへの里まで澄む池のあたり
見せよとて隔に霞をかけて一つの山のは

霞満山
春の立る海もみの衣の糸の源山のふもとに霞すみなか
かすみ日の山をまがへる春は猶おぼろなるまつぞ春やきく山
晴あらぬ山はいつれとたつをも富士のすそのゝすむかたのむ春に
春の色はまとかやいかにしらぬのこのかすみ浅ぎの山のふもとの霞を
峯たかく霞ふる春日の春たり光やつくゞまさるなれきに

遠山霞
思ふ海の見えるは山を隔て遠く峯すそにたちみえはてぬ
霞上ずり見えて春の外山の上も春なきは霞立らし

霞為山衣
乃代なるみに立て立山春の紀のまにあひな都をそゆらし
春なとくみや霞の色みとそ山脈をまどろませけむ

嶺上霞
みねしげく消おちぬ雲の深緑の衣を向ふたかみのかすみ添ふて
そのかふる代の世も三十ふ遠てくまむ春にも霞むふきぬる

連峯霞
なかしゝくてまやさるゝ遠近のきさる峯に霞まをひく

ゆきのこる谷の春日山わきてやれるゆきけつむすみは

立そめてまたうすかりし春道の峯にかゝる春の霞は

嶺樹霞

うすくこき花の霞のたえまにも雲とそ見えぬ峯の松かけ

初瀬山こゝの霞の木末におなつきたる桜やなかむらん

見し山本まて花咲ける野の霞にさへやなれやかるらん

野霞

野辺の若菜もしらまよへつゝおもかけ春日野にさける

野径霞

野には雲と霞とかゝりて行道にまよふ人の跡もなかりて

神垣は三輪の山もとさ霞も袖や法をわけゆきて

野外霞

花の香もみえし神のさきは霞と雲に泊りするは我

法のふかき山さえつゝ見れぬ野の霞やそのさとのかみ

関路霞

きさらきの野に霞みて山も霞を分る日のかけ

関の戸に道やとたと春の野の山は霞も夜にや

逢坂の山をこえて行道をへたつる関ちも霞にえきて

橋辺霞

我ためは夜わたる霞の衣まとふやかすかに宇治の橋姫

立見えは立まよふ鳩の海の霞にかゝる瀬田の長はし

江上霞

佐保姫の袖ふりはへ清き入江の月にみおく浪のかた見

霞おもひよりも江をもこえて物を捨しての舟はなけかし

霞中灘

春のかをなほきえたる江の波にみかける霞は

佐保姫の霞の衣たちわかれふかき朝清布川のかすみ

河霞

立のほる霞や春も大井川なかみの波のたちつゝ

霞たつ宇治の川の川上や世々のなかへる春にかすむらん

浦波もいさ日も霞にそめての名やみしもえてみ

海上霞

沖つ波かきりもしれぬ霞や春をまちかね

春の日の光のへそて波を宗にかよひ海の波をわけて霞かな

あま夜ふる春のかすみのおほろ夜にたえて行き波のかゝるめもなし 見え

蜑衣なれし霞の浦波や名にたつ海士のかけなるらん

たちのほる塩のけふりや舟をこゆかすむ霞と塩屋のかすみて

海邊霞

波風もかすみにこもりて流れ行く世の春の海つら

玉津島入江のかすみうちはふき春浦えする和哥の浦風

波風ときのかすみたなひくわかの塩の八百路より立のほる

うらうらに田鶴も群して和哥の浦の霞か内に春の朝なき

春の夜のおほろにかれし霞に行くめは浦の春の塩やのけふり

湖上霞

氷とけしさゝなみや霞の中文字に時

たち花波のかゝるめの浜風の吹上の海かけて霞あけ

春濱霞

長閑しき春の浜松まちえたる春の海そふかくあけむ見る 海へく めへ

社頭霞

日影さし春をむかふる神垣の霞めくる霞そのとけし

やはらくる光やかすみおのつから高角山の神のまにまに

春日野や松にみとりの春衣ふきし立こめかすみての神

松上霞

清涼殿のはし明夜は霞立そむる山の霞をみる

霞春衣

まちえたる春の霞に薫るのあやもひろへてかはもまされて

たちかへる大山もとの春の池のかすみやこれも世にかゝるらん

待早鶯

此朝まつ花の春やときを待つやかて宿れらいひす

まつとくひすの百千鳥も待こかれなや世のうきを初鶯の春つけてなき

初鶯

窓のうちに思ひもあへぬ梅の枝にきく春の鶯をきく

鶯告春

春日野の若菜はたゝぬ我つみに鶯の春なく

雪消ぬさむきいとふぬうくひすや花の春つけてなく

かきならす世をつけし鶯の春をきくのむらさきの初音

ふりつもる世のなしみや此春を神まつりて鶯やなく

たちかへる年の初やうくひすの声をはしめて春をしるらん

鶯知春

波の花に春をしれとや谷のとのこほりとけてや鶯のなく

春寒き霞にかくれぬ百とりのなかにまきれぬへき鶯の声

吹風のたよりにさそふ花の香をまちわひてなく鶯の声

夜中鶯

花鳥もわすれて夜半に明ぬまのにほひみたるに鶯のなく

霞裏聞鶯

さきたちて花をみよりもまさしくも霞のうちにきゝし鶯

暁鶯

聞すてゝわかるゝ夜半の袖の窓にわかれぬ鶯

百鳥のよの声もなくやなく

暁更鶯

梅か香の月も霞める窓の戸のよへなき鶯の初声

朝鶯

朝な/\声のうちはひを梅かえにきゝてや鶯のなく人

あさな/\寺をのこさぬ春をしらするうくひすの声

山里のひるもおもかけ春をしらする窓のかねのうくひす

あさ/\の宿に春しる鶯のなれぬるやむかしなしとなけ

朝日さすかたえの枝の春の色にさそはれぬ老の鶯

毎朝聞鶯

神の寺数のあけ鶏朝な/\たかき都をおもふらし

夕鶯

鶯も夕の窓にうつる袖夕へはおもふけふもくれぬる

鶯出谷

出る日は道の辺かくる春の声へとや待ちかね谷の鶯

春霞たちて宿をもしら谷の戸をいでぬる朝ひをすゝむる鶯

さくら花にかねなりし谷の戸の出ぬる鶯やまつ

朝つゆ春梅の花夜もすから霞の里かけて鶯そ鳴く

関路鶯

岩たる谷のこほりはとけとも春をしらする鶯やなく

行やすてもけふはかはらぬ坂の春を宿のまた関鳥の声

故郷鶯

鶯のなく都をはるかに出ぬ春のうくひす

春しらぬ世のやとに鶯を尋て春をさそいてやなく人

隣家竹鶯
庵まても花待かほの竹のはにそれと見ゆかせなくよ鶯のこゑ

竹鶯
世は春のことひ知らる窓の竹花待顔にやうち囀るらむ

竹林鶯
鶯の宿かりねすらん浅や山陰の竹のはやしにうつるこゑ

竹藪谷鶯
うつりきてすむ谷の竹の下折にわけるはの中の小枝に鳴鶯の声

松間鶯
咲てちる梅にはかはれ松の枝に花をやいとふ鶯の声

梅道聞鶯
袖ちらし花の匂ひに袖はれる鶯の声をきけはあかぬ梅か枝

鶯専和琴
うつしける花の世の中にも何の声を来て庵にかよふ春の鶯

鶯入新年詞
鶯のきこえつる新年の人にきこゆるはさと鳴き

春情也鶯
をちかたの梅をやわきて初音たつ春をやまちし鶯

鶯有慶音
鶯の声をのとけき人の家井の春にも世をそまちし

若菜
春の日の光わかなも摘てゆく野への若菜つむらん
きのふにも雪まの沢に折てつむまちわきしの春

雪中若菜
我春のつみける道をしれる身の若菜にとはゝいかにかたらむ
法みてし野への雪はきえかけし初若菜むつふんれる春のとをき

若菜稀
春日野の二葉の若菜若ともいはし老をねかはし春秋をなせ
いつしかと待て分し跡なりやむねいかにぬ若菜つむ昨日

若菜知時
春雪にとかかねしきつきぬ野にもとは七草摘まし
つみもむき若菜につみて春日野の野は雪とけれ花をや見る

朝若菜
いそつむ野への春ちや此程とけれはむつむ春の雪
わかなとは雪はきりし中野の初若菜春の花をとまれてすつむ

沢若菜
法みさへん春を老をねかはし君の若菜に千世を見ん野への若人
春日野の若菜に幾へてかいひとも世の春やつむし
ミ沢なへ野への若菜をこへてとつめいや老の行末の春
わしなやつめとやさしき春のやよふ若菜の露のかゝえ

沢若菜　きのふふりし雪をふまへて春日野の沢に若菜つむらし

田若菜　若菜つむいさと人のかりたや田面にのこりふけしめなるらん

毎春採若菜　若代の春にちぎりてくもゐへの若菜やつむとやにほふらし

春雪　やりとれしおもひけるかな山風や春にあらぬ雪の降さき

残雪　嵐ふく岩ね(?)の木のまも春へてこほれる雪やあるる山のは

梅雪似花　春いきぬ花をも見んとはなを見てえもいはぬ雪の枝やおもはん

閑残雪　春の日のきえもやらぬ色見えてまた雪残る庭のへの松

小篠雪　やわらかにまたす竹の葉をしほる雪見しまに消る一むら

呉竹の末葉下折れさゆる夜に春の宿とも残る雪かな

うれしの心へ見んとも千世の色深く松をかさねて雪やおける

松残雪　消やまれ雪を待る松の葉も雪を松とそのさや枝のむらん

木残雪　こや山木を咲てかめし花と所々にたかはるる春の名残しも

余寒霜　あの先の春を日数の消えはまだ冬枯の枝にのへりて

余寒風　みよしのの花の下のあやにに山おろせや春をまてしばし

余寒嵐　まちわびぬ春の名もしに咲なんの池ぞきえしぞさむからん

余寒水　池へかえる氷とけたる沢水に谷風は月のかげみをうかべまかせて

暁余寒　木の間より夜すがら雪は枝ちりて花消るかに冴る春風

山余寒　春の名に池へてまとふ花の枝のかを吹わし枝をさむからん

谷わたる鶯のはつね汀すみさて春風の跡やかんとなし

さえかへる隠の雪さきや春さそ朝霞なきさに残る消らん

うすき霞に立そて雪さえ山ぎはにまなく枝やさゆらん

尋梅　九重にとほへりは春まちぬと我の待わしぞかの梅かう

梅花告春　咲匂ふ花は中にも一般に梅の枝の香にほふは春し

栽梅　植へてしほともへとて咲やけるなる梅の花のさきさ

若木梅　いくとせの枝の梅かくれなし若木のさかる初花

梅始開　にほへ猶まれなるの初花をまつ咲梅の初やいかん

難波津にさくや梅乃初花も世の春やさくらん

見わたせはかすみのうちに咲そめて花路しき梅の一えた

梅殘梅　初春は千とせのはしめ何しいは老をもわかせぬ梅のえ

月前梅　月に夜の何れと袖のつゝみえぬ梅はにほふ風

梅風　とよりの手をまきこめて神垣のかる風を匂ふ梅かえ

梅花風韓　わかれ行匂へ此えを吹風をとふは春へきのこなむに世よ

梅薫風　難波津は此さくやの花の香世やつもりぬ匂ひを今さらん

佐保姫のましぬ梅や春風の香に匂ふらん

さく野に春ぬおりし此時そ袖かをわたる風の梅かり

梅香薫風　とりもあぬ風の香へに尋ぬるも本は知らせ匂ふ梅かり

依風知梅　梅か香を何さる知るは春もこてる何にまれなる風

春風先發花梅　吹からにいとゝ咲て春風のあまねき枝のゝ梅のり

暁梅　ゆふせんまきの夜の梅かにまえぬる夢は路の下枕

梅さかせしわかれて月もえ山の空の梅かり

朝梅　袖かけてまく梅かほるゆかりや花をこまれぬ春の朝か

春朝梅　とめかむ春雨にまわれ風の梅か香花春の朝か

夜思梅　思ひ寝の夢世をあく梅かやかんし雨をま此の花は追風

梅香　いとへ花し袖を匂ふ梅かれこもりん風の名をりまなし

梅遠薫　本は春い思ひの外にまてそよしまとへぬ風の梅かり

吹をくる此風そかるるまるや志けきか中の梅さかりける

梅久薫　こゝろなに染りても匂へ今年より春なる梅の花の香をは

路梅　行まつ此のゆくし袖の梅か香わりとや袖に匂ふ風

行路梅　ちれは又花あれはとやとひゆかんあかぬ折しも宿の梅かゝ

梅移水　行水に梅のうつろふ夕月夜かけろふきやは分かめそきける
たつ波は花ふかまる白ひかふつゝ絶ぬや梅の下水
添ひまし花は春そは花の下水にうつるけさへもあかぬ梅かゝ

里梅　とひくれぬ里のあるしと梅の花にほふする人かともみえて

隣家梅　うつる也梅しいかりに中垣をこえては梅をうつせり

故郷梅　むかしわすれて人もすさめぬ梅か花ちりそてこそる春やにほはん

里梅花　きいてし花はむかしの梅かゝにほひよく聞の山の春風
ことし行てあらしやあらむ春風の身にしみ梅は里と行くとも

庭梅　わか宿の人ことひとる我宿の梅の花咲かれ
鶯もやとりにきてつきしけるをしるへするわか梅かゝを

匂先花　むつましみの一かやしたて本には白そや梅の花の春風

梅花薫袖　返るされはおくる折の春風に内外をとらぬ匂の梅かゝ

窓前梅　梅のたちあかまて袖に匂ひやかてあかぬ春風もあし

梅浮水　散ぬさへ氷のとけし春のたのしけかな梅の下水

梅散随客　おやすくもちりてもあらぬ人にとはれぬる梅さくら手折をと

梅有遅速　さく花あとにまさるさとにまさる梅の心をそしらふ

梅紅白　さく梅は色ふかきをなのめにてそ花のさかりも又さかりなる

梅柳渡江春　時しるぬ浪をこめつる春の江の柳に梅のつきぬむもかゝ香
春柳のいとしもあら花の春の日に三をひは行ぬ枝をおきわのかを

柳弁春　こゝ海をむ春の庵くらさにちらてすゝ本のめを春の春柳
これむかし柳もいえけるる梅のいろくさまる春の色とさしを

柳弁春色　いとこめやをむかるるみのり折るくて世はなるのの緒の春柳の陰

春色先知　ゆえをむかるるうきまよ柳ちるゆえる浦緑するみちまなひきて

柳糸緑新
浅みどり糸によるめる柳さへはるかにかゝる風のまゝ柳れなかな

柳乱糸
乱れしなかに日あたる春柳のみどりのいとに春風ぞふく

柳漸繁
こ(?)渡りはまだ春雨の露をおきとり柳さはかへる春の糸の

柳靡風
久堅の空にひくかの川べの春雨のなびきたへてまた枝の

雨中柳
柳おなじ春のいさゝ風もなしかね雨と枝は皆ひきしく

柳露
雨はれてそことてゐる柳は露おきしうなる髪のみだれ緑は

柳似烟
佐保姫のまゆのきはこゝろもなくてこの春柳の色

遠村柳
とほく見え里の春のかすみもなきてに柳はあらひてなく

岸柳
春風に波をよる柳をいとのかゝる池の雨ぞふれ

堤邊柳
岸根行舟もゆくも川しなのときをおもえて靡く春柳

多心(?)の夜も行くにつゝ糸にかへる春の春の糸

柳もみどりになりにけるかなつみの柳はなほあらずや

故郷柳
ときはなる荻の門もそのまゝにふるさとの春柳

翠柳誰家
あすまでは雨のふらんをまくらの枝に春のいとをやる

この芽きれ
雲の春は雨の枝の浅みどりにあるいはのなかにそのなほゆる

若草
あけぼのはのかすみの空のそのはるかにて来る春の草

春草
のこれる雪はなんでの浅みどりはるかに春の野辺に吹く

青草漸青
春雨にまだふかきこずゑのいるのこゝろのやはるこの小草に

香草雑
まだ雪ののこる野にぞ春ならば草の色にも出る草の

野春草
わかみどりの嵐のこゝろみつかへすを春の野への若草

時はいとまやきの下の冬のもとも花の野辺の若草

園中蕨
見わたせば野辺の若菜の花は春のをのの野の

閨中蕨
おかしいわつれわたる池のほとりに生ひたる春のに

樵路蕨
つまるいはやいまのひもみのは道つくしかけてや

春月　かすみにはかくてふかき春の夜のかけしいさゝか月の影哉

春暁月　それやぬる霞のうちにおほろなる月にみえつゝあかすもあるかな

〃夕月　名残なくかすみそめにし夕暮のおほろ月夜のあけのそら哉

〃月迷　春もまたまれなのこゝろ月をみてかすみにくもるたえぬなみたを

峯春月　つきはれて月かけかゝるみねのうへにほのかにかすむ春のよの空

江〃　春の夜の月はかすみのうちなからやまのはいつるおもかけそする

河〃　花の香をさそふ山のあらしかなかすみにゝほふ月のかけ哉

河上〃　春つくせ雲よりいつる波の上に月やゆかしき春のよの空

春曙　月よりもかすみにくもるかはなみにかけもかすみてうつる月かけ

　　　春のよのかすみのうちのかは風にかすみてかゝる月のかけかな

　　　せきのとをあけて柳のおもかけも霞たなひく春のあけほの

　　　あけはてゝ都のやまをなかむれはかすみのうちの春の明ほの

江〃　いくえむ霞のうちにあさなきのかすみわたれる春のあけほの

遠浦〃　玉はゝきかすむ浦路のあけほのに春のひかりそのとけかりける

春曙眺望　ちるはなのかすみの浦の曙にかすみてなかむ風のなきさに

春雨　みわたせはおほろの山の峯つゝき霞にくもる春の曙

曙〃　ぬれてきて花をたつぬる我そてにはるさめのふるのゝさと

暁〃　春雨のふるさとなれやもろともにあかつきのそらにかすむ明ほの

夕〃　佐保姫のかすみのころもぬれぬらしはるさめのふるゆふくれの空

春夕雨　筆のあとそふ霞にもぬれてそめたるはなの色かな

夜春雨　はるさめのふるよのまくらしつかにてものおもふやとをとふやまかせ

　　　しつかなるよるのはるさめふりそめてやなきのいとのみとりそふ

　　　志かのうらや夜のまにそゝくはるさめにかすみのうらの春のよのそら

谷まゐ　なかきし岸をわけしも雲の雨の谷河ハ分もやまりて
庭〻　雲とつる名残ちりの跡りとけふもぬかきこの雲庭の庭
帰雁　秋小のこゑを今すり帰る人や旅の雲しも見えぬらん
まよ夜ふりて都にありしのきりの雲のかゝる人遠
夜〻　ありのけりとありとてや雲の名月のあきえよりふく人今
きさへ流ぬ月まても分る旅の雲こゝハとめぬ人のゆくれら
渓〻　かゝる人谷を雲路とふり流れやさしよやましひ路
湊〻　やとりもしもれ湊のわたりしとゐそりもや人のゆくらん
鴈別れ　ゆく人もやまの花もやましひて見られもとら人ハ雲まよ
遠帰人　都まても名残もしれけ人のゆくかもそらえ遠くりえ
帰る鴈　ゆく空もまよつけ雲の雲をかきつけ帰るりゆく人の子
〻迷　山さへ我にまもハ数の雲れなれとも雲ゆくも雲路をそらさ

雁待呼子鳥　わかそらそとらもりゆくらんやふりなくもれぬゆきまりさ
まゐ的　雉波にくらゆくみとられ雲のなかれわかその鶴やさるなり
のりけりもしらとやむもちりもれてハまつふらゆきの雲まさまそむ
雉　雲まちふりけりやハ見てぬれなそよき雲の雲まてまよれりん人
鶉　まちゃきも名残をおつる人なくりハこハ雲ゆくのらつこゑ雲さ
雲雀　床をしめてひりなそ都も分のりえ雲りそ人をゑかして雲け
〻迷　いくらもあり花や雀とつるくらえりに雲もれつゆとりゆく鶉さ
沢の雀　沢よわかりとこそつる鶉の毛も色も同しなきつゝこそ雀
呼子鳥　まつらるをゆくさのもぬ山のなみことりそまよきそりの人やゆん
行くとせしとら深山のすかそりさえ流見え人よなく人さきぬれ
稲荷清　いかり山杉のすゝしもニ月のさらし分れえそかけやら雨ん
糸桜　花かれ入て流れのきらん糸桜をもきもしそてよ深るも流さ

花

あたらしく八梅にならし花も桜やゝまたに咲る枝の春風
しら雪してちるまもなしや花数をまちつゝみるの日数かさせハ
白妙の雪のころに数ありしあと雨ふるうちきさらきの山
咲花やうらしの山の尾上のなかきさか花よりも八ふりつる雪

待花

花まてのしたてさけや咲れるきのみなてつるゝ日数を
まちこし人あやふくなるやもつれ〳〵てさく日かすそ待れ

瀬々花

みちゆくやながれつたふの瀬〳〵におりけるふなかせよなくて
あやなしに桜つれさき梅もにほひあてたるへし柳に

栽花

植ゑおくうつしうゑし桜かせのおもかけやなにみるらん
うふやまかけの流しれ咲つる山瀬ハむかしにさきし花

尋花

一本さし流ると尋ねても入ても山の[illegible]山路ハ
花よいのたに出尋ねても岩のかけさへ忘れ

尋山花

白雲やみかきこえふりきつる山ちかき花れをけさ行し
跡ふしとも見れ雲ふかやまの花の色とや根を
待花の香ふかき桜なる花を見さ

花初開 (未遍)

見そめる
あかきもおもふ花深くあれ流るも
咲花を見る一本の花ハちりにしてさいてもらん
まさ花咲も春をへ見ぬ梢もやさ今さき花初花

見花

昨日見し花を見れ見る花ハ折の花なりつ
あり花を世にひとしさも花もあかぬ梢とハ

静見花

いつしも見そことの友はきえや花の本数
いやともとこの花を見る夜ハさきてぞ咲

多年翫花

年毎の春井の流れかの雨の春をきくらん

翫花

花よ忘れ木つゝふる枝の風さへいとふ成

別花　浅からぬ心をそめて別れ行ハこれもうき世乃花にやはあらぬ

交〃　桜色を着るハなさけの下紐もまたむすぼれてとく花の色なる

ことにまた別やいかに白花の雲の木陰にたちてあくがれハ

嶺雲花　いくよ峯に咲つきてかみよしのさくらハ雲とまがひそめける

雨中〃　ぬれしも思ふ花をぬらさぬ袖とわれなけるをみれハ雨にかはりけん

雨後〃　ちる花にまたひとひし雨たそかれ音なりけりとむかふ木の本

嵐〃　打志めり嵐に花の色なき嵐吹たてて花にとなりし花の数哉

花映日　来てみむやまたうつろふ明(?)園乃木をわするゝ花のなけれハ

夕日かげ(?)そむかりけり枝をわたるまこと(?)のかりに

目わたる花のむかしそここにつくしぬ花の枝をかんせ乃家

夕花　こゝ消すゝめそれいそく入あひの声にさそはれぬ花のをこの卯

暮山花　来て志のし花の下かげにかへれハ端山ちの暮ぬともなし

深山〃　とハでやハ都にゝほふ桜あふこともひとやあれ住(?)こそ

花満山　雲もほしとへしたかふ花の色山をかしはしの春

遠嶺花　桜とはわかぬ雲のゝ峯に咲花の色をみれハ横にみえしをも

峯つゞき花をみてよ明わたる横雲志らぬ美よしのゝ山

志賀花園　都とていりく花のなかめハ世に咲ぬ乃志賀の花をも園

志賀花園蝶　身をえてはふこてられ夏のたに見るん春わかれ志賀の花の

園花　折袖の色もやあらん花にゝほひそれ見ぬへのうち

杜〃　桜色に衣顔をともるんた宿の陰ゆくみえの木下うち

林間〃　みどりなる木ことにけりたかしく咲花を春いわか木の間をたてる

関〃　雑木をる関の道ゆくとも人のとゞむる花の陰ハわすれん

水辺〃　末遠きゆくひの淵の川かはん流るゝをてる山川の水

ちる枝ゆきと風のまに浪たちて花の波ハくすしからん

不見花渡口　雲間よりいるる花を称波にこきわかるゝまねかやいふらん

社頭花　廣前の春ふ枝をさしかさしてみるかや神のみ前ざいなる

古寺　古る寺ふ山は流てふるすりくの初瀬の寺の入相ふ霞む

山家　見ぬ人をまつもあらぬ深山の春ふかしおもふ桜花の下庵

閑居　わび住まゐするにもかりて静かなる庵ほとなきにわひし思ん

花下逢友　待ちふぬとかけしるさを桜かり花の下にいひくらしてん

依花客来　見れはこそ思ひのほかの人めさへ咲ける花は宿にまつらん

花春友　さけは又老の春をもなくさみて情ある花とたのむそと思ふ

古木花　何枝か若きはいかや花ふ年ふれ老木のこの山さくらも

花根　花を根にかへるならふはいかに花は故郷と思ふ日さへ寄るし

棒花　長閑なる春を海のおかれくちるも花は桜子世をうるらん

手向　盛なる梢や手向の花ならん何ふ花をそまつる神なるに

花のあるしや　なつかしと花のあるしや春ごとに山の外の人をまつ

花のあるし　折袖をぬれつゝわかぬるのちの匂ひにかへす花の宿に

落花　あやなくのちもかくかへる散るをかしみんもや花のなか

同　なかなかの山桜木のもとちる花衣あかれやきえん見む

同　わたるをうちみていてぬ花の人にや春わかて散るをみるらん

未遍　散るとに残るをみて花さそふ風のつるさましられはいかに

河路落花　わたる川散りし花を吹きて風をかは水の流しつへ行る

落花埋路　散てのち誰かはふむ庭をよしやりうつめ花の志るやさき

入庵　流れひる花にとめしる春風は夜三寸の暉まとめも

遅速　桜ちらかれは桜の実ふるまきれて里を遠く人しきさ

ふこて流るる　ちるは又うらやまれむ流るるは花やきかひのかくも

花有喜色　千代の春まてもる御ちやいろをそへて花をにくらん

寄花懐旧　かへらぬむかしこれ春の夜の夢と見る花さへめぐる花に白いむ

神祇　流るれはなのかよりも花の咲くは花めでてまつるみあれかな

逐年花添　いやましにまさりゆく色のさかに春早咲てみればあかぬ花

花如旧　春ごとに年もかはらで匂ふへの春かわらぬここち山

雨中花有匂　さへ流るとまるぬ春の色ふかく咲花に千世をまちつつ

花時節分　桜色にほしそよめる錦の衣かはへるをち花のころ

春日霞　春の日の千ちはるみの常盤かと陰尾の霞立やまいぬ

野遊東　流るるさまにつきし庭の野べ草つむひはそふ東路

野外柳糸　かすみ立ちへの錦とさらむ日にあやかりよう見れしと

春日遅　ましきや老せぬいのちなき日とれとにきる春の錦

遅日　はしきにかとる花のよ春の日のかた尚かえて花にそくへい

三月三日　さへおれやかくかい柳の花かかるかけて見する桃の木かくれ

折にあふ花をも錦の衣とみてくむや流されりかの添つき

ふるいへに柳さくられ春と見て桃の下枝葉に花に咲らむ

桃　すみちぬ春れをやしる咲花のくれなゐそらか桃の下水

おれしかとうちよるとう咲交てすれ林れあかぬくれなゐ

夕桃　ゆきとぞなとりし谷の夕そへを流を春とむかすれ花なぬ

梨花　あふみんてえなきぬ花の一枝にかかる宿の折れつまれし

白ひかる色と見てつく山ずれ花咲うつむ枝ゆきとする

梨子　一枝流も花のひらふにるへ見波よりえろきあわれ浦舟

山梨花　木の間分きさ谷かも月の影見せてくる折られ山ずれ花

葱来　底のくる春流は山まし流にくるかすれとしてされ春をききぬらん

流くてるあかよしとそての時しあれは文の風れにかきぬらん

籬外葱来　折ぬ久れこす色かなす折そのま別てまつる流をくるめぐら

まちかねに文ゐるかのつてくめ古巣は出寄れ色そてありけに

江辺春興多
春風は柳にまよふ山水の江のなかく宿すら水のとなき

春日望山
山本して宿そわたるや水かげ川せさは春はるぞそむ山の本

径草
ふみならす人の道の芝生のつゆ茎がりえつゝまん咲かへるとも

籬(?)
みるたるま草の色は秋のことわりし花にさしまされるかな

橋
流てもむる柳の糸みだれもさるの根ふりみなれやかへらん

堂(?)深柳
柳にたむる糸も見かなる花もくを衰ともえてやまされ橋らん

河蛙
水さ残くなさむ小河のとは淵と瀬くれもく声をくれやく

田、
せく水の中あけぬ思ひあれやつるむ苗代小田の蛙なき

苗代、
かしまて春いつるとわる小田よなくや蛙の声ありうかなふ

蛙鳴苗代
ゆく流苗代小田にせく水を待えしとらしいつなくらし

おのが唱山田の春をくやまず守る水のうへすゐからし

雨後苗代
夜のまにあれもそなますせきやりかへはのせく志川ぞなかし流

連日、、
きのふよりけふの小田もまがりかいまへてうきま数ある苗代の水

夕、
水口に放まつる人はや苗代こそえなに田長やたなさまるらん

わきりして苗もみゆる山けふ帰る日今しもなるながしる

山田
そそも文なかしる小田ようつまそて山下くつれききぬ苗代

苗代水
せき入て苗代小田にまかせたる千町にながむれの流せ

春山田
ますくかつ春れいまはみ日わへてやわかまれの寸小山田すき

躑躅
思ひあれとたとふなんはとかりて岩根のつゝじ色にこゆる

、、名
苔むすは日かけ岩つゝじ山下てら沢花れそれすね

入日さす沢山下つゝじこと文に見えくるそれのくれる井

沢杜若
満沢のかかり咲花の色しとかく花かきつはたす

款冬、
よしの川ちりぬる花の岩ねもや春の水に匂ふ山吹

夕款冬　春ふかき色のみならぬ夕つゆにほふる山吹へうつろふてみゆれ

款冬花橘　花とみき岩根こえてや山吹の花は匂へる井手の川橋

河款冬　河波にうつろふ春は色見えてうつり行流の山ふきの花

鴻款冬　今はふれ雨にしほれて立花は水に浮めつる山吹の花

山吹の花も名にある立花の小島の春を雨すせてみん

岸ゝゝ　数ぬ色をけふとみんと山吹の咲まかれる岸の山吹

籬ゝゝ　さかへ人におもやつまさる山吹のたちえかくしのひとりなし

雨中藤　あま雨をうちむらさきの花は陰ありていろこぬれつやらん

松ゝ　咲かかるうつむれ松の松のみとりはるかに藤かかられ

藤松樹花　松の千世をかけて十かへりの春は先さく花に咲ふしの

路藤　立よりてかけしおもやまかとの行ゝおもはぬ花は藤かえ

巌岸藤　まつかけとしあをゝ岩ねに咲花のむらさきの藤浪

池藤　花のあと春風たえて池水の底なる影をなかむ藤なみ

さし藤に岩かね松とうつれて花は色を移る春は池水

渕下ゝ　うつ藤の色ををりかれ岩こえてましにすさる春は渕川せ

社頭ゝ　神のましの若なる咲藤の花にうつれぬおもかけのまき

藤花遠路　咲かかる藤をかえれすゑにみて花乃底なる松の下庵

若木藤　春日山うつ世の春乃梢へる松にちきれる小乃みちなこ

暮春　花なれなるも今花名をけふまでなりをかさこちれるや

山家ゝゝ　とはれつる花もおしのの春かてけふの人めにゝへる山住や

暮春雪　又もとへ春はゆくとも梅かれかるらんなりは宿乃さくら

ゝゝ盃　行春をおしむ心をたのむ数ともへとてめくる盃

ゝゝ徒　入相のかねてをしむ花の色へ春もよし花ちる

船中暮春　舟とめて契りぬ波は行春の名残ぬ岸のを隠すそこふ

春已欲暮　はきせしぬ春の手向に花ちるを惜む手の別れなりても
春欲暮　いくさくらの花紅　ぬる涙も山ふかしとわけて春ぞくれゆく
惜春　春風に浦をとふらむ花ちるをおもひかきし春ぞくれゆく
留春不往　雲風をさそひ行末もしらずとまるべきは花ならぬ春ぞくれ
とゞめえぬ春といふかひ佐保姫のかへらん道にせめて関もがな
山残春　そのかしわかれの山をもみちかも春いくよかすく山家の鶯
三月尽　あはれして鶯もなくなるよりもとん春を待ぞわかせん
春風　よもの花の常なき春を誘ひなば何を風と吹とおやしき
吹とめてわするゝ花をうしとて我をハ忘めたるを春風
神垣にさくし梅を吹ためて花のにほひよまとふる風
春風春水一時来　うち水もなるゝ水のわかれゆくぞさそふ春風神風
春江象　あまてる光よあらしにてまちわ春に出ぬる千世のためしハ
風光日々新　かつきやすき春きさ峯の雲花といふものかはれかはらん
年々ふりて花も誰のまかせんかる乃れ山峯の春のかくを
春暁　ふしてきくいつれ月花かおもふよの明るをしらん
明る夜をしのひ残す山のはに志めて見る春の横雲
〃夕　ゆふくれのかすみに花の山はいつえへわしく春いそくなり
〃夜　こつれてそ花わかれとて月花のよ
〃山　めもとるにかすみ深き山をそむかれえめる山ま田
まえまちむとつみさるに春いさ若草まぬ山のえまほし
潤音知春　石そゝくおちるなり春風にさそはれて氷とくらし
山家春　そこひれは伊友なり山ふとなしくつる身の春もとひなれ
春松　花さかぬみとりにあらぬ春風や霞むときめく松のむら立
松下春久　百敷や大宮人のまつ代を契へぬ松のたちに契りて

松契多春　洞の中に松のたかひハちきりきぬ千よひかさに春やそへなし

春松契千歳　いく世とかゝるけや契ゑん松にかひあるみれとならハ

松契万春　契るそむれきんせのゝ千世にみれ松にむつれ尽ぬ行末

椿樹八千春　人の世とありてれ椿乃玉椿わりも遠きハ千とせ乃陰

春竹契久　春の竹のよかるよわそこ節友となりやかて世千尋あるらけ

春若　これそ宮とけぬる庭に若の千代春に外よりの始とやらん

春動物　治しと世ハ春めきて百千鳥に鳴つる声もうらゝなるそ

〃獣　なれとみかしとみし世代よきれや桃の林の春に遊ばん

〃神祇　毛そて花さく出ちれ二月や千世に卯乃日の手向を

のとかなることけや緑く春の柳青白をこゝろ糸みれかゝらん

松柳　松に添柳おもひて乾きれ舟代とかさん春いけ水

〃祝言　吹風の音も枝えし百友や祝詞の松に千世乃まつ春

陽春布徳　天地にあまねくしてぞ春の光を花の色ゝへ分やハらん

毎山有春　分きむ日ハ立へて外の山路も志るやこゝ近の春になるまを

家々翫春　詠えてハ誰もかれと宿ゝにけふその春やさのしむ

常花契乃春　若代のとゝ契るめり常乃花ゝなくもちへあのかつとれ葉

色新酌春酒　立へく世乃のとかなるをもくみそ志るく常の春の盃つき

夏

首夏

〃船路

〃水

〃夜

〃郭公

林首夏

更衣

をりにあふやあるらん人の袂しき白妙にして

春秋にわかぬを時とはいへの花いたゞき立家に咲らし

夏のきて咲やるみねをこゆり水の末さへ杉むらしらん

散りにける春の名残の夜の花つゝむ木は夏めけしるかて

めづらしと見ぬ見にはるる名の卯月のけふなほ見つる

見わたせば林の梢のみどりにて春の夏いまにぞなり

出し花咲くらむ夏とまかねしつきりの竹の林に

車をもとめてみなる道は涼しきる楓のもとやしげき涼しき

千波の花の木　ともにあへる夏を見る林涼しき

白妙にうちかへて蝉の羽のうすき衣の名も涼しき

ちる花の跡もなくてなれし衣涼しくなりぬまたくおなし

朝更衣

ちるハいや花に咲くる人もそうきまかるる夏衣哉

山家々

こゝ涼しやとて引由ぬ山住もいとゞうき世のよそ深き袖

遅桜

春秋とおもひし風の情さへいまは花に又やいとはん

餘花

こゝろあてやしるへもとめんまたぬ花は青葉の深き木かくれ

夏きぬとまねかれし風を遅桜をあかぬるなとは又やいとひても

尋餘花

しるしなきかへる跡をたにつゝも青葉かくれの花やたつねん

まれに見る色はなほしと夏山の花に心をいぬまかろしもの松

余花似雪

春過し日数をたつね残りてや同し名に咲一木なく

新樹

花の木は中によりたる若葉の隙ともり見れはやかて白妙の花

たちまさん訓しき春をいつれとか青葉の桜しるき木深き

流れ行を指しやらん玉柏や涼しき葉の影と風やしる

見し花の跡ともかも隠れしや志きらぬ其の若葉の桜哉

枝に葉に年ふるさへや志るしなき夏のくりかけ紛ふ庭の木深き

花をまつ青葉は山のこゝらへ梢をのこして志る陰かな

若木もた春の名ごりの夏ふかく若葉の陰もわかぬ陰哉

新樹如月

花に見し木のすゑしけき世の流れわけ入月の陰そ見えまさき

雨中新樹

降雨やみるはしもえに芽ぐむんぬさてしらる山とさかえん哉

新樹露

置しは若葉の色に風もまれて志らぬさ露を隠れまし紀

咲ちりて夏しも暮る花の色の名残しるゝ木かけみどりは

山新樹

山みちに花しまちかは見えそめて花は山時る木々の若緑哉

新竹

手尋ぬる陰そすゝしき竹は梢末と細き世をかさねもよし

卯花

卯花のやとりをみしも色にしみし卯の花かけるうの花

折にあへは袖まてもゝ袖の香に卯月の花を志るかな

雪かと見し雨の後しつえ此雨たゝにも青葉に咲る卯の花

卯花隠　名に見れハ咲ともしらぬ卯花の雪にまかふとそのまゝに垣ねを

卯花妨関　とハれさハ卯の花月夜かけてやとまれさらりくは過

卯花似月　卯の花ハ月にかよへる一えたをとりて宿にそ咲るかけの郷

白妙の月のひかりをとゝめおきてやてらしてはなれぬ庭のかけそ

夕卯花　夕月夜ほのかにわたる岩ね卯花やくれあへぬかけとやみん

渓卯花　谷の戸の日影やうすき白妙の卯乃花垣をくれぬとやいふ

路卯花　旅人もそこに波やまかふ河沢の岸へかさなる卯の花の垣

渡卯花　見わたせはたゝ白妙にたなひくのこゝろつくしに卯花

卯花交路　分のほる波かと見えて旅人のゆくみちにたなひける卯の花

社卯花　神まつるそれ神山の榊かも卯月のそれはよくそあらはる

水辺卯花　見まかふぬ垣ねに咲る花の名のうちかへすそれとまかふらん

古村卯花　世の里ハ咲卯の花を人しれす中に宿の名のかひてあらむ

籬卯花　老をきてふするかれ垣の卯の花のわか宿のたちこめにけり

卯花似雪　咲かゝるわか宿の垣ねハ雪とのみ見えてまかふらんこそ

神山の二葉乃あふひ世をへたかなしさこゝにかれのかけしめるらん

榊葵　春過てさしそへてけり葵草老をまつこゝに世々に榊のかけ

神まつるかさみしらぬ人といかにすまぬもみかつらして

月前葵　年をふる花のむかしも葵草月のかけにてもちかく

山葵　むかしより経すかれをそへて神山のかけはあらはれあふひのかけ

世々にふるかみ山のあふひさうつの名あれともかけ

あふひ草ゆく世をかけてかみ垣のさす卯月をかけての山

葵色花　葵草わきてせんめてもあらはれ山を日かけの名にそあらん

むかしのみとりのあふひ草世をへてたゝぬ葵のいろをそ見ん

傾向日葵　さしそむる根にかくしてあやしうつる日の日影さすかたにむかふ葵ハ

郭公
ほとゝきす一声なれやみしか夜のなかき月は出て待ほとも
雲間にかけてなかき沢みしかよの待しもふ
里なれや時しもあらしほとゝきす有明の空に一声なかなか

鵜
菖蒲ふきそへつるしのなかき沢木の下の月に一声もなし
白雲のれ初音をこそ人に聞せてなかるらん

なほなき沢
なかき沢にこよひもつれなき声をまちてたゝ初音を待

待郭公
時鳥まつとはいとゝ人にしられて待そきかれくるしる

人伝郭公
夜ひと夜の月まつ時鳥なくとしれて聞く

連夜聞郭公
雨そゝくあさまたきつ郭公なきつる雨の夜半に

雨後郭公
月もれつる雲間の月の郭公なきつる初音なれさやかく

雲間郭公
清きさゝなすやまの月の明かた清かし雲にまかなき沢

暁郭公
時鳥なれ雲間の有明をさしてや月になるらん

郭公暁過　残るかとしのふ郭公たゝ一声の夜半の曙
朝郭公　雨はれ初音なれや外山の山なかき沢
葉郭公　なかき沢の山かけやしのふ雲よりかへる夕くれの雨
遠郭公　声のひゝきは雲ゐの月のあけかたもすゝなかき沢
近郭公　月にまつ一声ききつれ時鳥木の下の庵の松にかよふ声
郭公数声　軒近き松にきこえてやなかき沢老の袖にも声
郭公頻　子規声のなかきもかよひ語らひてちゝかへすなく
郭公遍　終に聞し深山のほとりにて千枝の数も郭公の声
郭公遂　月をまつ雨にかたらふなかき沢待し夜はのうちに忘れて
嶺郭公　初音こそ人に知しきれ郭公世の中にあかし声もなし
　遠かたのなかき沢にあかなく老の袖をぬらす
　有明の月に声そ時鳥まつ里遠き嶺にならん

谷郭公
岡〃
杜〃
野〃
原〃
樵路〃
海邊〃
浦〃
社頭〃

谷の戸を出て都にとこそ待されぬ鳴音も山かくさき寸
さけやなきこゑくるるにを待すへひて鳴る夏へ此山郭公
侍さ次ちのふへ月し杜の名をたのむかきれとも次第を
郭公なきつる里を海まさんて山と継さくる此色れおけ仍有
鳴てくるかとをやまさん声の聞きぬりくる末は山かくさき次
樵人のくるふる人へさふ声なきて里まんを見れや山かくさきん
某人のなきく形りし郭公たつ道入かたあらぬ山路もさ
んあるあ母山を松の海よとなぬ神さ竹んやとふ郭公
波風のこの名なれを清かしなくや夜への山かくさき次
岁けるも声やあるし海風のまへるかさかやなくかくさき次
をのかすをぬこひ田かりし波風の待さし夜への山かくさき寸
神のましおくれ松のかくさき次のくるかや声の木さうれ

都〃
市〃
船中〃
郭公稀
〃漸稀
早苗
採早苗
早苗多

くまふかみるいつれの山のかくさき次おてこやさこの宮ふなくらん
侍いきる市ふいれ先郭公声うる人を侍りしくるちをと
都しを侍る侍いく市場の郭公声うる声をなおふへぬし
侍るあれと庭まるへむとせさ舟とんて声の浜のおきなれ
つるまさの袖をふくへる郭公まるこの侍ハやられてそれく
なけの声侍をるるつきて此まうむ山なきしかとくさき次
声をれしおふ夕をなぬ日此侍るるまさかほくさき次くれ
さ夕千町のさ声へ植そてみとりになひく風のきしし侍
秋此女か袖をぬそれとも花ふれそぬれてかりくる早苗とる次
早町の田面をむるるくんそ文なぬ早苗や花のさくらん
冬も葉日なりさる田子ハ難波禰の浪より声きさ早苗とる次
植るる次早苗いる町なるいと山本々見そつくそ田ゐるをしそ

雨中早苗　五月雨ハ晴間をとへとたつ田の早苗田の早苗とるらし

夕〻　久方のをとそてて夕日さす沢や早苗とるらし

蘆〻　新見えてなひく流れの葉末より田面の蘆は旗風そ吹

江橘(?)　卯花の花をるる沢やあやめ草玉ぬく日に袖の菖蒲

菖蒲　あや先みさむく袖のしに君にかしとやらん

江〻　さしてかり　つ御やまとりのうへにさしてあやめ刈らん

沼〻　それとなき花水草のかくれぬの沼のあやめ刈るらん

園〻　あやめしもとは五月ハうつる袖の香のとも花橘の軒と隣かし

橘　下河辺御月次三年　白へ花も向とことし花の色ちて姫しき五月の花そて

　　ねまれ月にしつ嬉しと花の花ちちとれの香のしるし

　　百敷のとるとわかしえや花の花の多く香にたちるらん

盧橘　いつの世の志のふとるしたまにしらやまへてむかしに白ふるたる

百敷やむかしをしのふ花の色に折るむ遠き人のいにしへわかる

あいれさむかしの花の香袖もこれて五月のにほひたる

枝ちてかをる花のこすゑに花橘の花のきさへのさかえわかるらん

〻嵐風　百敷ふむかしも花をの風にたち袖の香にほふ白のみそ

〻〻薫　おほへる岩のかをるの花の香をあめれにふ花のたちのまよひつく

雨中盧橘　しをれぬハむかしを思ふてそかへるる雨夜の袖のにほひしける

夜橘　いつとなき匂ひハ何に身にしめる雨れ夕の軒ゆかしき卯

　　一夜しくあやめハ流るつの身に身にそふる花にて白ふる花

夜盧橘　見る夢の残るむかしを忍ん窓の嵐に香ふる花

　　風にしめて袖やつかしし静なる雨夜の軒の白ふる花

　　香やなほふむかしもしのぶる花の見ぬ夜を思ふ昔にひかれ

閑庭盧　ふるむかしおもへつる花めしいれ袖の匂ひする袖の

橋邊菖　白へ枝よそれむらしのはしめより植しくさのの野花さく花

對橋問昔　神の代もむかしなかりしはいにしへのよしや残きて今にきくらむ

杜橋　落まさへし花いさくりし山橋の下雨の数におちつきの沢

里々　おちちの咲頃には志るへとひあん山かりもさしぬ里のなきらむ

橋杜家　色いその山かりなからにさそはれはおちち咲やと

戸外橋　松のはなの軒ぞのおちち咲ぬとそ家の山かりふさ人もなし

五月雨　日数さへふりても長るかと五月雨に渡るをとふの山の瀬つせ

月も日もふつふい新たに三笠山なかと久しき五月雨のはれ

ならぬ日ねもすさすれてそのこゑを宮沢をかりの五月雨の空

降らし晴ぬる山の梢より又うちの外る五月雨のくも

五月雨いつくは日もわれはいまの沢のはしめつらしさ霊芝をそあんむ

河みれなかこ　新うらしなりけり月のこゑかれや五月雨ちりくくもりりちかて

夜五月雨　岩のもしてまるむかのそしらぬ夜も明たらぬ花の五月雨かな

五月雨晴　見つかる雲間の水もうすら日にむれて晴る五月雨のそら

橋五月雨　山人のまましもや五月雨にあと絶さ嶺の雲の水橋

江々　杣人のをわかなる江乃杉小舟こそまた久さす五月雨のころ

瀬々　流まかきく岩雲なかん瀬の氷まされて見ぬる五月雨の比

湖々　五月雨いとつみ隠く枝あんて沢波こやまる志賀の大わた

水鶏　音をへせそ人いぬる夜の枝の戸をたたくや何の水鶏なるらむ

鷺　かね流る江の水鶏もあやれ月をとこそ松の戸ぼはさしてぬる夜を

泊水雞　と夜さく水鶏たたくみ窓をたたきて枕寝の波のうきね

水鶏驚夢　夢をおちにさめぬぬ枕の夏の夜すて水鶏なく此月やうらめん

夏月　世は志らぬ旅やよその三日月乃とこ涼しさならし涼しき

夢をさめるなけりてて夏の夜の嵐に入ぬ月の端波よ

涼しさはしけしの杜の端居して袖にかけたる月の宿かな

白妙の袖にうつして夏しらぬ霜をかしこく月のやとしし

夏月涼
夏しらぬ露を流るる遣水に月のうつれる影の涼しさ

水辺夏月
わすれ河かゝるとしらぬ新枕やなれてもやすき月のみしか夜

夏月易明
鵜の声またふけすして明にけりさせる橋のかけしの夜はの月

夏野月
沢におる蛍も月の影かくるわかぬ夏野のかへる行のみち

海夏月
夏刈の難波の芦のかり枕月をみしまき夜のや月にかゝらん

湖上〻
雨のをりのまゝくる諏訪の海に夏なき月の氷をかしく

浦〻
舟に出ぬ見るめにあかて明方のまきうらみを月にかくる波かな

磯〻
風そよく月の芦へに出ぬ秋の声きこゆなる和哥の浦鶴

竹亭〻
尽る夜をあやしくはきあつき日の入ぬる夜は月にかける磯も

折過る竹のまとの吹きみてゝぬ秋風なと月そとふ

とこ夏の花
ちりてこそ名にもとまらめ見る人の袖にはあかし床夏の花

胡折瞿麦
白胡の垣をきぬる身は床夏を折一枝のゆかりや似さらん

籬〻
花見んも猶や隔し山かつの世々さき垣に咲るなてしこ

夏草
夏ふかく志けみに迷ふ草の原さえも人の跡なき絶てん

かる人も分てや通ふ道もなし夏野の草の茂りのみして

〻露
此夕かきまとかぬれそめて露むすふしきに庭の萩原

〻滋
秋まちて咲花あるも見ん志げるをいとふ庭の草葉も

志げるとも秋見ん花にゆるしてはかりそめし庭の茂みくさ

杜夏草
花見んと秋風ちらし夏さけて老の杖の陰の下くさ

鴨河
鵜飼ふねはやせにかけて夕月の浮せきやらふてもは火

うか人もおへはけすれ籬井めくて老のまんなかのうき瀬を

鵜船多
小夜ふかく瀬々にかかる舟の数見えて河瀬もさかしき火の影

遠近鵜舟
いさりせぬあはれと人のかゝり火をけふ河波にみえてうかへる鵜舟

照射
ともしする身をいとひぬ山の端にしのゝめちかく鹿のたつらん

照射欲明
さ夜ふけて秋さの篝のかけきえて鹿やすみかのあはれをもみん

峯照射
明ぬとやみえしやとすれハ峯の上にともしつるらんほのかにはみゆ

原照射
身を捨るしかのなる日をさゆるゝやたつの峯のはしに

蛍
まちえぬ夏の篝のかけをさそふらん野原にまかすともしかな

蛍ハ光る也
さのみしもいはぬ身をさへもらしけるあさき思ひの蛍なりけり

深夜蛍
浦にはすゝしき蛍の光なるをさみ夜のふかくやひかりいへん

橋蛍
かゝり火も消て夜ふかき窓の内にしはし蛍の光さやけき

水蛍
かくて流ひろひとまる数への蛍さへうつる水の浮橋

蛍の夜ハ瀬々のほとりに光をのこしまとの波の音にたれ

明つくるおもひの蛍とも木かくれのかけにさくらむ庭のやりみつ

湖蛍
さゝ波のよる蛍ハ芦の屋のあま人のともし火よ湖の水

浦蛍
沖かけて山もとの浦にたちし湖風の芦のかけにかすむをみる

蛍過窓
あまの浦をいさ海士にさそはん芦の葉をわけゆく浦のあたり

里蛍
窓過て行のもとの夕暮に見るともみえてもゆる影かな

蛍透簾
くれて行里のしる人の蛍のかけ清くするゝ垣根つゝきに

草蛍
みえかくれ影の蛍やおほかたに簾の外にてもしらせて

晩夏
蛍の身ハまよふ蛍の思ひ草やおなし原にこもれる

夕顔
秋近き夜のおもひの草のかけさらに夕風にちるかな

草のたへのあかにせ行かひてくれをもしき夕日のかけ

さかりの影の光を見る人のおもひにかゝる夕顔

さけハとも蛍の垣ねの夕顔ハ花のあるしそかけにさく

とひすてゝ見れハあやしき垣ねまさへすゝしき花の夕顔

沐庭夕顔　数ならぬ垣ねなりとも隔なく花の名は人めなる夕顔の花

垣〻　垣やつれ垣ねなりともたのむらん花をおもしろ夕かほの花

たそかれのかけるとまかれ垣ねにハ咲てやをれと夕顔の花

夕顔露　たま露の光ハそらぬ光をそれになすハ丈志らぬ花の夕くれ

蚊遣火　結のかゝぬ軒をしつと夏の夜乃みしかき程にたる蚊遣火

いふきたちも見えし軒かは夕けふりそれかとふも焼るの蚊遣火

まきのやにくゆる煙や玉かつらすかしとすれとすさし蚊の声

浦蚊遣火　よそも火ハ夕ゆりて浜の蚊遣火とや夏ハおすなる浦の海人

遠村〻　山かけの里ハよそめにかれ〳〵と煙やたてぬなほひとり志らぬ

閑居〻　いかせんをとめて住つれ〳〵閑居にむせふめ宿の蚊遣火

池蓮　おとしはぬ池の汀に吹風にまつやかゝる池のたちかへる

荷葉　見るかうちに涼しき露をまろひおふ清波かよふ池の蓮葉

氷室　あつき日もしらぬへこそ消えかぬも深き山の木かけの下陰

きえのこる夏をもしらぬ氷室すてに山の井清水

あさかゝる山の奥まてさかて氷室の御調世路ぞ絶す

瀧〻　ともしかはるや御調をすける氷室守山路も夏の外やさし

岩井〻　いはしくの氷室もるらん涼しくて岩井のこる山の木陰さ

夕立雲色　雲風ハひとすくさそふ夕立のなかりにあらぬ野の下つゆ

遠夕立　此里の日をもやまつ雲風の行ゑはるかし見ゆる夕立

嶺〻　夕立ふ洗し衣やれる日の峯にかゝれる天乃かゝ山

河〻　水上も一むらくする夕立に岩波たかくにこる山川

海〻　海ちかの山とも河も見えて海より出ちにるはる夕立

村〻　吹風のをやしの梢うちなひき夕立さそふ一むら先里

雨後蝉　雨そゝく波の風にあらそひて志くれに蝉の涼声

朝蝉
涼しさハ蝉の羽衣引よせて次第くや夜の白れ衣の袂かれ

山、
うつせミれ涼山の高き河へ出てなく夕かけの声ぞすゞしき

山路、
蝉の声夕暮ごとに涼しき夕暮の袖をもみて行山路かれ

木陰、
夕附日かけろふ影の木のもとに蒔をすゞむる蝉やなくらん

林、
日くらしの声ハ夕暮の杜の名れもきゝて夏を近き秋を忘れて

涼み、
秋の名をもまだ知らぬ林にや来てぞ鳴く蝉の諸声

晩夏、
山さへも涼の色もきぬ交りてさそふ風そよぐらん蝉のもろ声

扇
声友のうちに夏やしらぬ鳴蝉の羽山の葉は嵐ぞふく
らん秋を招しくの秋の袖色にて月をうけ涼しき団のおもかげ

風
鍋夕の月に声しきん秋風の出けハまつべき扇もなし
涼しきをまじ月影てハ大ぞの風なをや次扇まらん

団扇
きよくへる扇に涼しさの初月なの篁の小松風

泉水
見ぬ世まで岩根木の下かけ暮て夏としらざりし水のなんも

松下水
清水せく岩垣の苔ひとつ涼しきこれぞ松の下陰

近水微涼生
袖にまづ川べをと涼しう結ぶ手の末葉をわたる水れ夕陰を

納涼
秋まで扇をも忘る陽ざしぬ寸袖の下陰

夕納涼
夕附日かけるひまよる庭の尾花へ袖の涼しさ

納涼月
夕まぐれ月を清めて夜をまつ床のおもひ涼み

樹陰納涼
なをかへて夏を涼しき山かけの木末ハ宿の月影すがるに

夏祓
御祓川夏ハ行せの夕波や姫を清めて立ぞかんし

禊、
以上ぞ夕川のうら波をなべての姫しき流る御祓して同じ

夷禊
此夕御祓につゞく清流もとまり人はさや七ぬる

荒和祓
御祓する年の秋の清流と夕波寄し加茂の河つら

夏日
見まま紀行つきに今日ハ秋となぬる時き

夏之象　いつとなくなまめとも影しく雲ちらて有月の夜ハうきくらになる
身もたえりふれ日も文くすゞりくる此日ハきあて涼しき
夏風　夏衣ハみも若さらん野辺之袖ふ南の風ふきれやく
、雨　さみたれ野神の異を流れると風さそてきかふ月の那
雲急消滅　常なる此日もくもりひぬ山の端の雲ハあやしき峯たちて
、曉　秋ませぬ曉のよ涼しきに程さめて　夏のならひ知れたら
、昼　まてりかきもかみハあつき日もとこすりもちれ昼くるせみや
、夜　庭の水のおもてかうと涼しきにたくやかけるみしかき夜の
、海　こつ海ハぬれてもぬると夏衣あつやなる沖のなみ波
、木　花ふ尽してふとしても庭と見て桜の葉ふ陰しれつれ
、谷松　夏のをふ谷るおれ谷陰の水なきもたる松の木かげ
夏枝　ひとき沢への枝なれなきたてる影もれ枝のそふなき
、杉　杉されは杉夕日をさゝる此陰の木の下すゞしき葉柏
、苔　おて出し夏の露まれめうつりし緑いとけ木のかた苔の
、鳥　ねきて水鶏そさらよてゝ鵜の明けはかり月のしな夜を
、獣　つれなきの鹿もかほの明の月かけて秋もも鳴なきし沢
、虫　夏地はやふかしても声や鳴ふみん秋をもまつ花の花を待と八
、雜物　若も声ぬ虫ちまる野ふ声すさて其の隅なる秋いそかり
、枕　草をうふろひぬくれの風すれや吹する沢扇もしまハ何をそ
、莚　いかね物んはうひいすゝし蚊の声て程さめぬ床のみしかき夜
、泉　あつきれいそぬるさとハ加る変の庭れさむしろ蚊ハ遠き野
紗羅夏衣　文行いきかしおもや声まさん葉なく夏の月のさむしろ
国遠く蚊の声てよ紀の泉のくかもかふ草をみしかき
木々色も行いかりさへ夏の夜もまちて涼しき蝉の初こゑも

夏旅　蔦楓茂る若葉をかき分てむかしおもはゆる此山道

夏眺望　野も山も茂みかはれる色に涼しく詠の末そ見ゆる也

秋

立秋暁　一夜のまに移りし暁に夏の名残ちに蝉の声かな

風告秋　此頃の袖吹風乃涼しさは荻の葉のゝ秋を告なる

初秋　今朝は桐の一葉を落して秋の風めにさやかなる露をこほれて

初秋月　吹そむる秋風なるやかゝる新の木の間もれ来る夕月夜かな

袖風は涼しきそなき夕くれの月を待つ程に秋のそら

初秋夜月　新にそよき萩の夕風のふくにつけても月のあかさに

同風　此頃のすゝしさは身にしむはこれや今朝より秋の初風

荻の葉と桐の一葉にそよきてもきゝて秋のはつ風

同扇　此比おく秋風にさそはれてあはれや扇袖をたゝみん

早秋　露見てる日も浅茅の末葉にすりそみかける秋の初風

同露　蝉風は涼しき露も桐の一葉にちりはてゝ

数へむる言の葉に代々の玉しきの千世の数ある秋は来にけり

早秋暁露
秋きぬと袖にかよふ露よりも明かたしらむ窓の月かな

河辺秋
まちあへぬ梅のかへさも吹かへる音羽の川の波の初風

浦〃
住吉の浦のはまつら吹かへて松の志つえにおくる浦風

新秋雲
これをこの秋のはしめと吹く風の立よりてなひく白雲

〃〃露
秋きぬと心ある露の見るまにちる桐の一葉にかゝる白露

早涼到
秋よへた露をさゝやや数さめて桐の一葉におくしめる
きのふまて之まれつる袖のこの夕くれは梅風そよく
三日月の秋かせの寸涼しさは露にまかへて荻の風そ知らるゝ

〃〃初秋
扇さへ涼き夕日のかれの袖にふや風吹かへて秋に涼しき
桐の葉にひさいすゝ秋きぬとしらする袖のうちの初風
むすふ手に夏そ忘れし涼しさも水の流れにうつろへる

残暑
わき風かへつ袖をまたん国のこれにかへしも涼しからまし
扇さへまたゆるされぬ秋きてもまた初風のうとき夕くれ
吹きする梅風のうちまたにきく沢扇のさそふ日ともなし
涼しさに立出つゝ月まちて袖のすきまる秋の夕川風

七夕
待わたるかひはともし一とせのうらみやそへん明かたの空

待七夕
まつ宵のあふさきやとはるかにも忘れてうき瀬の天の川波

七夕て象
秋きてはいくよのとほかりぬ妹背の思ひ乃るとまちへてやすむ
神代より流さめをかきてや久しき天てらす星合の夜のためしき

〃〃月
天の川かれわたりにすゝむる夕の月かけ月ゆうかひて

〃〃雲
あかなくし雲の衣とかくるも棚機女のよはやなきらん

〃〃地儀
落むちれ出なりかへし星合の露乃一夜を代々まつらん

〃〃橋
うち渡る袖さへあつらん世やしらぬみちの橋乃秋の初風
そのえの羽をすゝめる笑りまやそしれたるらむ鵲のえにしき

名所七夕　あまの川夜と契し世ゝ人のなかゝら向のほし合の瀬

七夕待戀　きのふより年をゝくりてんけふかな浮橋のてれ川なみ

朝霧になれぬそいせぬ七夕乃かきそて見れし露れふるもい

〃草　志ら菊の手向をとゝる星合ハ露そる草をわけんとやかん

〃草枕　七草に夕なる手向まうけよし今宵そこれその花すゝ流るゝも

〃鳥　星合の々をかれてくもかの幾ら羽をかし秋や待く哉

〃杉　わたれむすふ舟やわたん織女子夜を一夜の枕にゝるも

〃瑤琴　名よりあひてんきとなる志るへと海のつゝれつるふかき名

〃祝　家々の庭の袖ひの糸を決まりおいしろ代かし会乃姝

乞巧奠　いくとせのんやまかせ向かし会のうけ待あらん雲の人

星河秋久　世ゝの秋かさてやまちぬて川とふしの一夜をとのむすさせも

〃〃秋興　七夕のあふせやしくに月みし夕風まかせてれ川なすく

今とその浮木にのりて川よみちの橋の秋やそめし

星夕言志　いく萬代かはらせしてあま河ちぎりうれしきよひのあふせは

おなじ心を　頼とてハあふてる七夕のしむるかな年に一夜のつきぬ契りに

たなばたの　七百機にかけてたつぬの織手をふいたゝめて常ならん

二星契久　天河とよる末のあふせかと幾き神代の秋やかはらん

織女朝秋　うちむすて秋の一夜を契せしの幾末を紀てぞ此川波

〃〃待夕　我ながら星やうらやむて此川たれかつ袖にかゝらんとまで

旁織女衣　これやこのてれ羽衣旁ふあて明る夜かしむかし合ぬらん

牛女悦秋来　秋いきて一夜二夜をまつに又いつかと星やまちかねらん

牛女述懐　衣とや星ハかつらん人ならぬ袖ひのいとうる紀世をと

銀河月如船　天川ふせまや々き夕月のひかりや星乃つまむかへ舟

鵲橋成橋　くちぬ中めるてふ橋ハかはらきの羽をそるかる鵲渡しかな

契りおけやとわたる橋を七夕にかはらぬ色のもみぢちりかゝる

萩
簀閉の人まつ秋の心をもむしのすゞや草むらのかせの下おきて

、、初秋
蝉の羽の袖も吹かへぬ秋風もいつになりてかよそ萩原

、、風払露
秋の野ふきまされて吹ぬくれやむすびおきし露の萩の上風

朝萩
露へおひぬ野の露ふりし秋の萩吹とめぬ萩の上風
寂しさもおもひなれや萩の花夕かは似ぬ色の秋風

江、、
波風さそふ入江の塩風に花さへ波さそふ萩が末
舟よせし波のよるべのふるさとに入江のかせの萩原

江の江やほのみえし萩の末葉ふく秋風の声

江上、、
江の秋乃声もさそふ江のこずゑ秋の声つゆや萩の上風

逢居、、
人きかぬ花の秋風にあひしるしてちる萩原
うきよ世も秋の風にさそはれし君にそよぐ萩原

萩似人来
もろともに萩の花にまよひし人の萩のにほひ

聞萩
風吹けばよそに人とおとろくも聞くはおもひし萩はすゝき
吹たかひ手にもおもはぬ風の萩の音にたつらん

萩近枕
床近き萩やさそふ秋風のやどりにたつ萩の声
うきよ秋の夜すがら秋風におどろかれし萩の上の秋風

聞萩枕敲
枕とふ風の下萩おきもせでゆめをもさますね

萩半綻
咲きかゝる枝も萩の花はまだひらきそめしつゆもほころびむ
さく萩のこずゑかつ咲て枝花まつ露の萩の露
なかなかに咲ぬを思ふ萩原花ある枝の数やそふらん
まだ咲ぬ枝はかれやこの萩や花の小萩もまじらむ

月下萩
新やと月をかけし枝かれぬ風を待つ萩秋の花

萩露
咲萩のうへにこぼれて玉散る下葉にぞかゝる

原萩
小萩はら花よりつゆのおもけれて袖にうつろふ宮城野ゝ萩

野外ゝ
都にはかへぬ色そへて小萩原ゝ麻をちりすゝる玉日かゝ妹

野径ゝ
分ぬきて女郎花萩のすり衣宿のしるしをわかぬ野へかれ
宮城野ゝ宿かる衣もかれぬきてみだれたるまゝ秋ときの花

萩満野径
咲みたる花をいまはた捧麻の手に添也く野への萩かな

行路萩
玉ほこの行きゝもまゝ萩原花より衣をやたわらし
名もしるきいさゝんまのゝ浦も秋しられ宿かし捨遠の萩原

萩花映水
秋の河やさ鹿の瀬にはり入ゝ渦をさむる紫の秋を花
萩か枝を波こすよりに咲ませんきをもおきさ秋の下水

浦萩
秋風にかはぬ此浦のあまも袖の色やこゝ深き萩の花摺
老か秋のこゝろやなれ浦の萩のとにおもる玉あふの露もらまん

遠郷ゝ
うつろふも秋の山ゐに萩のえを宿もかはぬ朝夕の山

鹿ゝ
おのかしは花をさそふめ宿かりん小鹿鳴てふ萩の花を

秋恋萩花
下草の中よりしも先て枯しを思ふ萩の下わき

女郎花
をみなへしなをひきそへて我かとき露あはれんにあきつてへして
あるらし誘ふ秋風を女郎花むすひとめぬ露こそるらん

小鹿風
その秋はかるゝ風をとよみそへしかよるともひきそはれん

径女郎花
手折きし袂もこれ行末の女郎花ときゝては都し名をもをしみて

女郎花交垣
おそれへし垣ほは秋の野をこめて内外もいそぬ花に咲けり

野薄
遠山に宿をかりしも尾花秋のさかりをいそく野へのけ

薄作垣
秋の宿やわれ田のかふに薄かけひてもとの垣ほにとかる尾花 又

ゝ露
あれ花風の野分の露をはらふまし尾花か袖やおきてくさ消ん

薄似袖
名も花尾花も秋の袖とふへは誘ふなまめくしれ宿かるらん

刈萱乱風
秋風の吹しく野への刈萱のそよくみたれてうらやかに下おもし

閨刈萱　袖の乃刈かへぬ月れ中ねふ乱る床なさき地への名やける
みられてハよねやまくき刈萱やかすきぬ月きれ思ふへ乱る
庭〻　乱るる月をせてれ刈萱の中ねハやし庭れ有花いつせ
んせよ我心とかりしき刈萱やれうれを尽ぬ庭の秋風
叢荻風　荻を月咲むらさ花の一もとに地へハ花る白ふ秋りを
〻露　秋露の志めりもおさ荻をかぬ説つり思を白ひそらん
詩草花　秋と心へなん花露をむそ橘花やし庭れ荻のハ
草花〻色　見草の花とうへん色も見し地もせを咲る秋のさうハ
地かうつけりされハ露をうぬこ流とさるの色へ色みれて
朝草花　おきハ見むなるのいろし露けさふなひくおとれ庭れの草
秋草　これも文字の千まされ秋風に花を思ひの露をこまうし
草子欲招　うつかれハ浅茅斗む見ん地への末乱むかさ名あいりゆく

槿　咲ふ見ん日数も刈物のはつまきを露ふわつ乃朝白い花
隣〻　咲かりへいつる垣のこなさまれ明れそやいうへし朝顔
露落　かきへふたまたまさると吠る枝の里や地の世の露ふ乃らん
秋暁〻　おきいそう見流るん露の光ハ有明のかけれうすきり此雲
朝〻　草れうへの玉きとされハ秋の露の袖まられぬ露をおきむ
秋夕　さう秋のおもひ乃露にまつハしよ夕とされハ袖ふうくらむ
夜〻　ひかりおき夜ふ深の露と哀さかき見しほおもひをそ見や
露深　尾上の光りをかハす露ゆかして浅茅ふや秋そ乃庵ん
悲露　秋露のいくつ浅茅ま袖ひちてかやか地へれ露の中床
庵〻　おきを見ぬ露の乃をも哀をふ消をてすりつ思ひきぬらん
露くきをおいくうらんへのたまもひかかきし庵れ下りよ
露路晩　秋の館ハ志かれもそてぬ秋風ま花すりれなる露そこれすく

竹露
小枝よりこほるゝ露とうけとめて竹の末葉にやとる露かな

苔上ゝ
庭もる影はかりそとまりて世に月夜露やこほる苔の通路

枕ゝ
夢さそふ園の秋風身にしみて結ひかけゝる草の枕の露
いつくれは秋風の袖にそより露わけもとめし小萩か本松

尋虫
里人はそもしらぬ露分て思ひもやらん虫の声々

垂尋ゝ
とまる花の風をま 蔦葉ふのうらみふ虫まこ飛かけ

月前ゝ
月になる夜ことにつけしや軒やと深き世の露にさそはるらん

暁ゝ
ちかう花衣しほるゝ暁の空に虫しけるみそ我ん々鳴

暁更ゝ
有明のつきせぬ秋の哀ひとやもなきりこ虫しのすくらん

夜ゝ
独への露にまかれかきこそ虫しけすくなうしみとハ秋
のたりわれはかなりて秋のたはなきそなる虫やすくらん

雨夜虫
長き夜をのみちゝてやをやゝ雨にまさる虫の声々

野外ゝ
秋ことなき露のやとりを誰とひて枕かれ松むしの声

野外尋ゝ
今こんとたのめぬ野へなく虫まつ夜ハなにかしかれは

江ゝ
沼みなくし露そいとゝ深く行かな草むしの石の芝草

山家ゝ
世のうきをしらぬ山人の袖さへぬるゝ深松むし鳴

水ゝ
里ちかくこゝハれぬ月のうつる人いふるためと松虫のなきく

田家ゝ
行かへるふる里秋風ハつまも深きも小田の庵そ

[illegible]旅宿
浦芦はらかきしハ露のまたきてとられぬ名さへ松虫の声

床虫
夜虫も寝覚のおもひてしとし暮のあはれさぬ秋の思ひに

海辺秋風
ゝも誰か秋風の深ゝ散ても波の音きかん

田家ゝ
引捨てかゝる田の中にも夜をとのこすハ秋風そふく

月前鹿
草木の露まかれても月にかれ今夜たからの鳴こゑハ見しも
所しめて哀ハ深山の月ねさへ夜ふ見せくる竿廉の声

夕鹿　夕月夜鹿なく山のこかけなるにつゝる妹とまちはわらん

深夜聞丶　ふくる夜をなくしか声も哀には哀しれは身やつれなき

鹿声驚夢　我ひとり猶さめてそ一夜住山の岸ねとなき鹿そなく（本）

丶増興　なかめし夕への小萩はなも亦秋の内なる妹をやこいかん妃

咲たきのうらむしさはし牛鹿の下秋のかなるまたはあらて秋

聞鹿　きく人の袖ぬおハれを秋のとこしへ志る沢や鹿はなくらん

山丶　為年をつくめる秋をらしと山の尾上の鹿や妻恋てなく

深山丶　なき祖世をのかるゝ神と山路のなき鹿（なく鹿）ハ外山とそなし

山嶺丶　鹿の声をさかさふとかきき山深くおもひ入ぬや妻せこふらん

妻恋る鹿の音近し峰よおろす松よりひゞくる哀志られて

洞鹿丶　おもひ入鹿なく谷のこゝろをもしる沢やとのへそやつれなき

杣鹿丶　春日山や嵐風と秋き杣鹿まてなさひしりや鹿そなくらん

林丶　なく鹿の声ちとせんて夕日さす沢なる山林をも隈なすき

野丶　あさつきに小萩か下の鹿の音は妻まちかねて哀をそ聞く

野外丶　秋ふかし咲ける鹿は花の名をおもひおそや妻をこふらん

海辺丶　礒のへの妻まつ秋のうらみ侘て鳴や礒辺の浜鹿の声

旅泊丶　小鹿なく礒山もとの夕月夜つまに小舟のひとりそ啼

田丶　旅まくら礒辺の山をなかし鹿の音きくにも妻恋のみ猶

なかきよそ小田の秋の夜を稲葉にいさし牛鹿の声

田家丶　小男鹿とふぬよひや妹の田の庵にかりし（本）

鹿隠萩　すりおろす袖に門田の露そふりて夜ふかき牛鹿の声

咲萩の下にかくれて牛鹿も妻恋かねて泣

丶鳴秋萩　秋夕の露ふして夜ふかけれてまたに鹿なく秋への萩をそ

丶声近枕　夜ふかき夜の夜をあかぬらん秋の山の牛鹿の声秋

浦秋夕
故郷ゝ
遠村ゝ
秋夕膝
秋田
ゝ風
ゝ露
雨
秋野霜

沖つ波の波の音を世にな詠めそ又なき海の秋の夕暮
墨染の袖を涙にひきさき夕霧にかゝる人の情をとりつや
見し世我は忘ひの行衛も袖に涙そてなりゆく秋の夕暮
ねむや泣きり立秋の山水はおわしなにあれ夕暮し秋
雲風のその夕暮そしろたへのこゝろもふきむる秋の夕暮
棹鹿の妻とひ来ん声をきゝし所落遠き秋の夕風
夕暮ぞ沢山の田風風んそてまひくいなを我衣を冬さき
稲むしろ吹しく小田の秋風に涙床志免きりく庵てられ
秋風の穂ずゑみふきしく山もと小田の秋の夕風
袖の志めりぬるゝそ夕暮の稲葉に治る小田ち行く庵とみてなり
庵すせ此桐の落葉にふりしてくりもあへぬ秋のむら雨
秋夕の霜にいまき此野への色をそむる一夜の秋の神しも

月
曙月
連夜ゝ
待月
秋尽ゝ
閑ゝ
獨ゝ
連夜雁ゝ
山家ゝ

よやみよみ経すらに秋の野に露の花すいつへ分き
なかむるに花見ます浦秋ら浮き志るもむ月をやさき
むかんとおもへはやゝ涼し世の此秋見てこ志のゝ雲晴この月
まつ浦にうつりそる此秋の夜半見ひかなる月いつ
さ夜ふけの空やいかんあさゆきさ月の名をいる主いさとも
来てひとみし宿しそおもふにい月の影のまりれをあ久しき
有此夜のなかきを秋ふかくてや待れてかなき山の端月
秋の宿いなかし見ふ夕ふかくかれいいそゝ山の端の月
見わかくに我人待へ池そてる月影み見て思ひ寝む
年そへてありひよるき月見てそせめてめいな友のお涙
まてい月のなかけをこれ友との一くさを拾ぬ余居て
志ばしとやねかきふんさぬ山のの尾とへぬる月此のうさは

初弦月　まれにもかゝる月のかたちなくて海よりの出る影は糸かも

侍千月　逢ふかく雲吹とちらしゆふ月より出れそらの秋のかせ

稍傾、　いけ行は沖にもかゝれ宵おわりと完中の月は出ひ子波ハ

三日、　中空に出れしと見えきや三日月の入るさ近きかしれ山のうへ

新、　此夕戸毎にむかへ新をはしめとて夢後の月にわたれなる由し

上弦、　ゐる鳥をおとろく秋きぬへし宵より木の間もてらる弓張月

十日夜、　吉も夜に光をまつへし秋をわきまへしらるの月かさ昇りそ

才の朽とい早ふやゝ淋し世にあるゝ名高き月は月と出ひて

名をよまに光をそらに立る夜の月ありいつの月かきへん

八月十五夜　光てしとは老てまえすさ三十ゆかり八月の中名ありおふ新

あひにゆひて秋の七宵ハ名さへ世をこちぬる月やはなく寝ぬ

くもり名をさしくもるもこてる名の月さかれんを数まねと

十六夜晴　まよひより世の光見えれて月の夕れ名も出るかとあらされ

立待月　いさよひのきのふ新をしまけの末に立ゐていさよふ山端の月

居待、　すりぬけて待もひとの月は峡雲と柳しも松の端にゆふ

下弦、　山近く見つよりも入新をしらぬ夜も海の弓張の月

九月十三夜　居てしられぬのこや名ありおふと宵は月の角にやわりん

てらせ行る秋は海の外までも名の名とさへさし長月の新

世にみてらるの長月の十日ゆかりこゝろや家にてり増るらん

十三夜月　いかしつの光まつや新おの秋のの出れる長月の計

秋風をこゝろへてさまそ一年二度月の名ありおふの弟

あられんて宵は月と長月の新にゆるの旅もしまれゝく

長月の月の名ありふとよひ又こゝもや完中の秋の光を

又ゐるへひなりたれ秋の光りを西木のうつ長月の一の計

月前風　秋風の枝をとふれをてしめ色に見えぬ影をみるらん

〃路　足引の山路の月の影みえてはるかにしるき旅の行末

暁月如晝　くまもなき光ある月夜に空あけてたとるも夜の道の月

夕暮月　山の端を出てたる月の影清きに光る夕の月

終夜月　明かたの人の夜もすから月をなかめて光る夜の月

山月明　山の端の峯にかかる月のみかけまてもちる月のきよし

嶺月　うつろふ峯の月のかけ山の端に光の月の峯の月影

谷〃　雲かかる峯の松原さしのほる月のかけの谷の月

松〃　見る人の谷の月の光りて雨のはるゝかけの月の光

野〃　松風に吹く野の月のかけにて木のまより見る月の世に

地外明〃　くもりなき野原の月の夜の光にも月影の光

　　　声もなき月の影やとる月夜に光る月影

原上〃　月やとる野原の草の影にてわか袖の露の秋の夜の月

関路〃　逢坂の関やとまる影の月にも光る沢

橋〃　月にかけしわたる橋の影にかよふ秋のよの月のかけ

水邊〃　かきやとす影の流の波にうつる月の影のきよき

沢〃　水よりも沢の影にすむ月の光の沢の月のかけ

江〃　おもひやる江の月のかけ見えて江の光の月

江邊〃　見えてとまる影の江の月の影を見る月の夜

瀧〃　瀧津瀬の中にかゝる月の影の光る月の影

月照瀬　水上の氷のくゝる岩の月の光る瀬の月

　　　さしのほる月の光の山の端の夜の瀬の光

河邊月　布引や影とる月を見る秋の河の月のかけ

　　　あすとや影の光る月の夜の河の月

湊月　秋風にや湊によするうきしほのよ月のみは友にあらて

湖、　さゝなみの松山を限る波の上に月は千さとの志賀の辛崎

湖上　雲きりは湖の風のはらはれて鳰てる光月そ照へし

波、　月やそのひかりをひろふ藻浅も波におかてる影そ世に似ぬ

いつこ海川せの小舟さ浪かとまきてくらけれ月にうつして

咲そ秋を都にもちしよしみまも月やけぬ波の川せに

都、　と影られ見る川原の流りして都の秋そ月にみゆらん

海山の月はいつまでさ庭にもや見め秋を月にしるらん

社頭、　てらせ猶その神山のおもひくちめ秋はうつ植の月

古寺、　て清りかすめひしかし今と世をてらすや秋の月かなし

故郷、　錆と知へおすられ寺の鐘の声と今宵は月をやさすらふ

住人のある世にかはりもふきふる月ともきる秋やへぬらん

水々、　片川の川波きよくきむ影は月のうつちる谷出きかする

庭々、　光てらさぬ夜寒の詠めかて名田の月は秋の山風

閑居、　顔むしも人あれ音は絶えてや花ぬれ月を寂しき

田家、　むすひと見ぬ稲葉のかりきつらひて月をかりかのやとりともなし

田家、　かりあけて猶る山ふもと雲もなき門田の月をそ綱くもれつ

秋ふきのそよき音つまる月見て門田のいほ舞ふ寄月むすみ

隣、　んら秋の嵐おろして月にみる寄りは庭の音しをめる夜かな

井、　草むらく帯れはやとる影をうつす月のいつより岩井の底

園、　月しきおれ浅るる園の枝のり嵐としくは袖やしほるらん

谷水、　あまる秋の枝にうつしは月の影あれや底深き流人と見るめかき

浅芽　露まき露をも庭は光いかは月かこかふ　浅茅ちふ

月下菖　変をりの夜とらぬあやめの葉むすほ浅の月や恨らん

月前竹寄　夢をさめ竹のかこかむ影とめて月も夜半さき窓の呉竹

松間月　里とほみ松原こしに行道にやとりさためぬそれも月かけ

月前猿　山人の影しつかに月てりもあさ深て猿やなくらん

こよひさへ月のおもかけに山のはおもひおこして猿や啼らん

月下遊士　いくかまも忘てやあそはまし月にうかれ秋のよもすから

釣叟棹月　あまの小舟さをさしつりのいとまをも忘れてさしも浪の上の月

月出渡友(?)　この世みんいかならん秋の月老となるかそ見えたる月ハ

月照衣　更行ハ霜とおきそふ白妙の衣手さむき月のかけ(?)

船中月　あくかれにさそひて清舟やいつかたに行月にみちたふ

月前橙(?)　久方の夢路ハ吹てやもさそふらむ更て照そふ月この宿

月見つゝあかぬをしらせ秋の夜にさそひ(?)澄かはらまし

月契秋　あひにあふ月と秋との中ことにかはらぬ世を契そ契るらむ

月契千秋　千世の秋かけて今もいく秋の雲やよとの空ハ月かけ

月前擣衣　あふさかの秋ふかきの外にもなき月よみの影(?)

惜残月　おしとおもふ有明の暁の空わかぬ月のかけのかへ

入ぬれハ空さむき月の行かたを待てハ西の山の端

湖辺(?)　はてしなよの湖の音にさそむ波見えの山の峯の松

海辺(?)　さしさす月のかけて渡る風波をはなちて

月前述懐(?)　四方の浦のなかめもちりもれて松二の根の花をはやく月ハ見え

寄月祝言　松浦やさのゆふしへのみるめかや沖にさしかゝる波の上の月

寄月眺望(?)　幾代との秋かけてまし君かこの月のひかりやよそにも見る

中秋聲　山里の秋ハ木々の音する衣擣に驚とり鳴声

後秋　咲出る花ハつゝむの秋ハおれし限の道ハ霧に埋ぬる

々香　渡まて咲花ハをすきやうつらふ霧わけて枝白菊らん

初雁　声かりしてさきねさめてめやいつれの空の衣のかりの杯

雁初来　細戸明てさらぬ峯の白雲もまだ見ぬ里の初雁の声

遠初雁　此秋も峯こす旅なる明けをとや都の外にきこゆるらさき

南北雁　今つるや遠ざかる雁がねは遠方に友したふらし

月前雁　明がたの南にむかふ雁がねや月にむかひて行くかたを見すらし

旅中雁　峯山をこえてもゆかし秋雁の知らぬ思ひにかりや鳴らん

芳園雁　若木葉の思ひこされてかりやりくにの外の秋風の音

雁成字　かきつらね見しよの世の筆の跡と見えてならひしちの雁の一つら

夕陽雁　秋風の雲ゐの空に立そめし夕陽の影や雲渡きぬらん

旅雁鳴雲　たえだえと都の空の雁を見て旅なる人に物思ふらん

霧　大の方に秋き夕日影ぞ見えて夕霧の声にかへるらん

湖上雁　沖浪のとをきむかしの志賀の浦よ見や行く秋の物思ふ

霧　細雁あはれ声を八重すきる峯の方よりへ立のぼるらし

暁霧　あまの河たえぬ秋霧の立田山まだ夜の風に晴れずかかりて

林霧　秋の日も沈みし木の間の雨の名残の外の跡

関霧　峰こえて夜半まで世に逢坂の関やへだつる関とぞ見るらん

堤霧　いつはる柳のつつみとおもへば夕霧にかくれもやする

古渡秋霧　小松の二方の絶えて人も渡して寂しき秋の夕浪

湊霧　明けぬ夜の湊の河風にたつ霧の浦志にそて見え

田家霧　けさ見れば一木の松の秋風は更けに立ちまるる志賀の辛崎

山村霧　かりほせる神のまへの稲葉にかかる秋の夕霧

暁霧隔松　山里の松の木の間もまぎれて夕霧のかかる山への道

擣衣　あけぼのの入江の月に棹さす舟行く霧ぞきえぬ

遠方の旅人の秋の衣手に袖かけてや衣うつらん

きぬたは袖をうきたつや何の男の旅寝つゝこす風砧有

月下擣衣　なきつゝ袖ぬすれ月にきけ文ことなれ衣を夢を恨むる

追〻　ほぬる夜のわと拾ふもわせと我のうつゝは風のきぬたに

遠〻　地へ遠き落ちりこゝにこゑひきてきこえてなれや風砧は

擣衣到暁　おのて、

洞擣衣　波風のうきよしぬ友やあるかみの洞さめぬ岩に衣うつ音

隣〻　衣うつ音さめさえて山かつの枝ゑかゝるに夜のよ近き

松下〻　山深き川音と音する松嵐かくまつ枕は陰とこのむ落は

詩人〻　またしてせむる衣をうつさまくらなる夢を恨むる

月前鴫　世のうき床すんはの浪にきよう紀死や鴫羽擣

暁〻　見る秋のう槌をうちて袂さめすり物をすし鴫なくなる

曙〻　明ける雲を見かけもすむかへの秋のかなしき鴫の羽のかず

沢〻　命しらやたのむ水沢の行末すき水に数く鴫なくなる

沢畔〻　打しも何れ梅の沢田乃うきに我かきつめし鴫の羽かず

田〻　山田守君のうき数なと語らひてあかつきかる鴫乃羽かき

羽かきも　うちあまる君のうき光秋れうき数は羽かく鴫をかそへしを

江鷸　なれのこや秋の思ひはつきゝ江に浮うつゝと袖をそよ鳴

里〻　すゝ捨し里はあるまゝ秋をへていかく鷸の床やしほるらん

名所〻　ゆく人にきこえぬ衣と深草にうつゝと寄て袖やぬるらん

尾萬　きへて住居への秋を寄れ葉の萌枝にふれてうるされめん

野分　あれそよりいつふかんるくききも末とて萩の枝にふれ吹きしほるらん

　降そし雨とおやそて吹とふく分られ枝ぶりの雲雨もあく

　あら南き枝らのきなりて草にも末をたえぬ手に吹きしほる夢

故郷〻　いとゝしき何れ日をひぬる故に枝ぶりまさりとふ人もなし

菊栽　咲ぬへき千世に似ぬ色をそなへんとや植し籬よ
ゆく末も千よの数ある花の菊文字の秋をかさねてみん

、久馥　よろつ代の秋ハこれやつもる数にあまりて菊や猶匂ひいまし

、花久馥　陶靖節栽菊、呂湛花開白菊波数千歳之秋也　宋史世家　蘇

新菊有清芳　咲しより秋風も猶しら菊のにほひそへて千世をこめたる菊の花

菊花色々　咲菊は花のちしほに色そめてたちかさねても白き千代の秋

、露　千世ふへき時をも汲みし露のつゆの秋の菊山路の花の千世のみ

毎朝看菊　折かへしの菊ひらくれや此朝のめかくも似たる白妙のきく

池上菊　咲菊の影もうつす池のいけひたしぬる千世の水を写して

菊綻禁庭　幾千世の秋をちきりて九重にうつろふ庭の色そしら菊

園深菊宗　千世もつきしすへてうつろふ花その色さかりにも菊そ千よへん

菊満庭　植そへて千年をかはん咲菊の庭ハ山ちかくも見えける菊

籬菊餘芳　ゆく菊の色に通ひき秋さへも日をかさねつゝ露の底の道しるへ

菊粧如錦　かゝる錦おりやしらむ園の菊この秋かねてぬきみたれて

菊花叢抗　かはりきてわかぬ錦の色は菊花をかさねつゝ也ハ伝へし

翫菊延齢　幾年もおりしきての中のみ汲そや千世経ぬ秋をかさねむ

採残菊　千世をみんものかしらきこ露に咲ける菊はそのしら露

菊笑千年　君がの宿よ千世経る秋を笑ふらし九重の庭のにほふ菊

、為祝寿一　しら菊はては星かと雲ゐにふりへゆかしき花の光みえけん

、香春可知　咲菊を遠なるひてはこたかりや花しる香のあるらん

秋菊盈枝　色香ある中枝にさくはおなしからぬ花の姿いろ薄き白きく

伴菊延齢　色々の色をそへて菊の下潤せむ秋をしへけむ色し

谷所菊　庭なしきて咲ぬる花の折にあへハ香をかハぬ綾ハ此濃

重陽宴　幾千世といのるに尽せて菊の花をさし咲なハ汲九重の秋

咲花を九重のまへに見よとや秋いつの君かことはは

柞紅葉　ちる露深くしむらしも見つゝやさしさにはふかそ秋のはゝそ原

もみち　霜にあへす散ぬるもしけのもみちかさね手入の色につくさて

松蔦　つたもみちけふそへたる紅葉に松の一はを

黄葉　今日又へ時雨の小深にぬれそめてもみちなりけり

手入にいそく口なしに手入は染めぬもみちそ

深てみる色やあはれにしほれぬ手入の露の紅葉は

旅紅葉　たびねやあはれ手文にまよひ見るも道の紅葉もみちは

欅〃　枝ふかく深き紅葉はいつれの色をそへてかはし

紅葉遍　庭の面の木も木もなへて色に今秋山の木々の下紅葉深し

〃深　深そめて来つる色の手入も身に染みせる秋の山姫

〃霰〃　峯に深色なりて紅葉に見ゆる霜もなかそあらし

月前紅葉　露おつる月の桂のもみち葉をみるへきものかなりけり

紅葉帯霜　霜見つるも限りと思ひて色なきはゆきにもみちやつきむ

雨後紅葉　むかし雨の名残の紅葉して色なき山の端

夕〃　わか山の木末は秋の色なれて夕日にうつる峯の紅葉は

山路〃　数しらぬ手入の梢にて紅葉の山を越へて深いる

関〃　旅人もそめの関守や夕附日さすや関への紅葉にそある

江〃　紅葉たは岡辺の紅葉にうつる手入の色や浅からん

河〃　立田川水は流れは枝をこえ波をもそむる今日の紅葉は

古寺〃　をちこちの色に深める空の林の紅葉やあはれ

里〃　けふもみち誰やとふらん此里の軒のもしほれぬ里のなかに

竹間〃　呉竹のしけみに枝の下紅葉こゝにまちる色めてたさ

紅葉勝花　花も又春のさかりと咲なから秋の紅葉に

松間紅葉　もみちをはやまし胡らの中深くまちる松がえにもそめて

秋欲暮　暮てゆぬ秋へはゆかれぬ志らひかんかれなれは秋やとめまし

舟人惜秋　漕とまる舟もむかし波いうはのにおもひし秋の行末を惜し

暮秋　行尾て志らしやとまる秋をゆかれなまよみちのちりはそ

〃月　名につる末わかれしのそらひ秋をさいけふも宿してみ波

〃雲　身にしむ色は秋のなかちのほそくも有明の月

〃路　行秋の跡をたつねてもなれゆく道にもとまるよとも

〃海　秋の色を志るへともなく苗をそ見そむかしにそゝも紅葉の

〃友　生月の雲にも志らぬ雲路の霞にも紅葉の竹のいつれのかたにうきことはかなくなれる

旅泊暮秋　紅明の浦をかへさる浦ゆへにせめて秋をきく花をしみふたつも

行旅のきそのみちのおもひにも伏いより友のとかりて

うれしてん城くるを泊舟いそぎもみちのみちをこそ

惜九月盡　くれぬとも今宵はあれし秋の露かきくもれんと思ふのきそくれ

秋星　天の河水のうきす星もえぬり袖ぬれ色き秋のよかけ

秋朝風　袖にきる夕ハ露く涼しきて朝風のさびし秋のそら

秋山路　明ゆくる月はかくれの山のはを分ゆく旅人の手ぬ涙さそふし

秋野夕　今はとてかへるやま路をはらそれなみ木の葉にそよき月をやとりて露ぬれし

山路秋過　行きみとふみわけぬ秋の行衛とめぬる山ちの露乃下つゆ

秋橋　秋のくる夜志る人のよそにしてもかけ渡る袖をのみ山のかけはし

〃河　わたりきてもみちの橋の名をきく流るる秋のなみしき

〃浦夜　月よりも打寄らし山は更るもの秋をくめる秋の川音

〃社　はるかなる海人の磯をまちてみし月志つかなる秋の神垣

水郷秋舟　稲葉山わかしを旅の鳥をみて月志つかなる秋の神垣

あきは水底てうきさう流をたえや志はしまつぬ宇治の柴舟

秋田家　かりのこすをしつてせしのちく門田のかりにおやまかし

田家秋雲　まつ母城をくもれ稲葉に露かゝりて店をくりおるに出るは秋

秋植物　かれ去つる流も植稲かゝ我をこう秋の千草は数ふらへかん

〃草　露にうつ花は千くさのあきなれや秋のうちにも消えれぬ（まどぬ）

〃思　秋はされるすりしの思ひ千尾花にしける袖の夕暮

〃鳥　あはれかくれは山千鳥をこ木葉を寸しを侍る声

〃菊　清かれん千の花の枕とぬる玉れ露をかかきよれ夢

〃雑　廿はありこゝとせはもくぬ百歳をよる世こ人の秋をたつかて

冬

初冬　萩の葉に見れ方の色も子をして秋風をこれ冬はきにけり

〃　菅かける秋をあかくの流をそうすへてれ冬ゝは来にけり

〃　出化山作し袖のよみちをそおまれけりすり冬をと衣ゝ志して

〃風　吹かへる冬きれおもしむはるるま袖みおかえて冬をまきにけり

〃時雨　志られもく菊ときのみの秋かけて見えしおかへる冬ゝは来にけるも

〃　木の葉さへ散るひくする志られかる店やするに沢みてはきかけり

〃　秋をすこしきれふの雲れをれつるまかく志くれて冬やくるらん

〃暁　あきるれぬ寒夜の床れゆきえて稲をめかれそ冬はきにけり

山家冬到　都をも冬をやゝ清かに松掛けり志られてかるこれれすみくる

霜園冬来　われぬ有いしく去秋の園のうちに文年つる冬をまきぬるらん

時雨　風のうへよくされてをれみれは雲や清き我伊駒の山に志くるる

むら〳〵にしくれてあると見し山ハはるゝ夕日かけの峰
山風の峰にさそふ浮雲やくれ田もわかに又しくるらん
木葉ちる秋のなこりハしくれにもつれなきいろと松も見えける
かきくもりみしハいつこの日かけさへ消てしくるゝ雲の夜な〳〵
難波のなかめへて冬来ても松をおとすや花しくる庵

時雨を

舟波すゝしくる夕日新陽のあらしに松ハ枝しくれつゝ

船時雨

ふなれ行ともまよひて友と小の湊に網のす雲に見えしくるらん
まよふ舟の行衛しくれハ空に見日うきゝて友晴くもるらん

落葉ゝゝ

夕月夜かけ見えし紅葉をおちてゆく新なる時雨かな

時雨廻山

やま風の行衛のうき雲よ山すり山や花しくるらん
浪つきや跡なき末もしくれぬ山やなるらん

松時雨

筏士の袖ぬれて友しらぬ松風をくるしくれ哉

杜ゝゝ

秋さむくまた見ぬ色の杜の紅葉ハさきにぬとや花しくるらん
ゆふ浪ハ木のはさそひてあらぬしくれと染る神なひの杜

遠村ゝゝ

人のあれ時雨をかりに友ならぬ遠山の里やすらむ

山路ゝゝ

まだ秋をしらぬ日の行の尾にしくれて冬をおとすらし

閑居ゝゝ

袖ぬれてかよふ村しくれやすらん打しめる夜に

屋上ゝゝ

あかつきしくれて杜の尾にすむ袖の上をたえぬる

関ゝゝ

杜の尾にすゝて色り時雨や袖の袖を杜のこし

槙上ゝゝ

まつかる時雨もえてしくる友の空をみし関のや雨

時雨易過

すそのをぬるゝ方をしくて夜友の志くれまよふ杜の友
なにはの老の袖見れしくれをまよふしくれもつるゝ杜

四瓣中時雨

笠やとりしをれ若子晴やかてハなるゝ友志くれなり
日数ふる旅の衣をかりハ山より山にふるしくれかな

落葉随風　ゆくらへ風のさそへは從すしめなすわか木の葉の思ひこそすれ

〃〃嵐　村しくれ過ニ夜ハ杉の門明てあらしは落てしまらん哉

曉落葉　夕ゑしより月書よ明の窓こしに数さへうする風の落葉は

峯落葉　落つもるとやは清きと流波の峯の紅葉ふらぬもそのこする

河〃　立田河きしの秋の深山や冬さし波に落葉せるらん

おもひかはら浪のみちの手川よわたるふ風の志からうの夜

谷〃　楢の葉深山おろし乃谷そ木に散の行をしも志く床のたえ

路〃　いろのよる落葉ふみわけ志ぐへかりて秋やゆくらん峰の山路

橋〃　山人のかよひて行峰もかしこみちもなし志らる谷のかけ橋

流星も嫌いらよひし河流れとも紅葉をこさる雲の浮橋

落葉深　おかの浦のよおもひたるとの葉の今より清見れつもる木の本

橋上〃　数志けるこれを紅葉の橋とのさて川原の岩やうち渡し

瀬〃　瀬はせの音やいま清る風まぜて木葉ハ雨ふきつゝ降ても

吹かふみち降るき山風さそれて清る瀬のしら糸

河上〃　さそふ水わたしまつる山河や落葉ふかむ瀬ゝの岩ね

窓〃　木の葉落葉志らぬ窓の内よ誰落てて袖ぬらすらん

今はあふ雨は落葉ふの嫌と思て朝日よりも白ぬ窓に

落葉勝花　ちるをちれいおもきの袖みそむろふ落葉は花よりもおもると

残菊　うへおひしゝ花やそらあとたえる乃て冬さへ遠うつむ霜の残菊

見残菊　嫌より色衣と見えなやむ小さきの一もと庭に残る志らきく

残菊如秋　又移てふ秋たえぬ色とやちらしてされうしのこるしらきく

〃傍流　香日ふめて秋の数ハ紀水ふ折る色見えて残る志ら菊

社頭残菊　房なきて秋のそら菊かれをれの宮の神前の清れを見るゆ

庭〃　一枝庭て節るもぬとは誰かうつしゝこれは残る庭の白きく

霜

[illegible]

冬暁、　老の身は[illegible]霜[illegible]

夕、　夕月[illegible]霜[illegible]

[illegible]

山、　秋[illegible]山[illegible]霜の[illegible]

[illegible]

山陰寒深　[illegible]山陰は[illegible]

野外霜　[illegible]

橋、　[illegible]霜[illegible]橋

関、　[illegible]関[illegible]

庭上、　[illegible]庭[illegible]

寒庭、　[illegible]庭[illegible]霜[illegible]人めも

竹雪、　[illegible]吹風[illegible]霜[illegible]呉竹

松、　[illegible]松[illegible]世[illegible]霜[illegible]

枯野朝、　[illegible]枯野の霜の[illegible]

[illegible]人めも[illegible]世の霜の下[illegible]

〻眺望　冬枯の霜を[illegible]秋の[illegible]

百草の秋を[illegible]霜枯

木枯　[illegible]松の[illegible]木枯の風

夕〻　[illegible]入日の[illegible]

寒樹交松　[illegible]秋の[illegible]思ひ[illegible]松[illegible]

冬されは[illegible]松の[illegible]

[illegible]風の[illegible]

[illegible]松　[illegible]松[illegible]嵐吹[illegible]

寒松霜　これも又以つよもろぬ冬かさんよ経ぬる霜の一木の松

茎残菊　きりくも常盤根も秋すりや冬さき霜よの庭よあく菊

寒草　霜枯ハまのゝやうれすてえんし秋風の聲のけと有し

枯そて秋聲なるかなえいつ迄とふ霜の下草

きしそ枯花さまの末すなれ雨ふ霜の蓮を枯ての流る

志もをぬ本の中山葉をもろかれた芦をとく花の名残の流

野〻　霜気の上をさよきえし秋ふ見れ神の名を淋しさ

江〻　残のとり冬枯の了て地ふ霜とさぬ萩の古枝ハ

寒芦　見ぞれてハまさえ見すや江の江乃山岸すゞ草の霜気の比

〻海江　白妙に霜のあるを故芦の中ふちへ行る池のおしうを

中冬　波まれ風に乱れて霜気の入江ハのこる村芦を猶し

雪をくれ数ちれる幾にハすゞみをとる日数さき記

大節　いかにへの乙女か袖も雨るきた今ハ路きぬ雲ゐよひ海

豊明節會　乙女子か舞の袖のみ須神の上ま散る花をえにて舎ゆて

氷初結　とちそめし袖のから氷の薄氷あるふ胡をさえて降るく

今よりハ水の氷や光るさきの谷かけさえしめぬらん

谷氷　つらひぐるかいハれてそのすに氷とくる谷の岩かけ

氷海池　冬もしまつゝひし氷の岩まそいけの氷ハさちとのとち洸

湖氷　湖のあハとかる岩猪よ冬終て心まゝ落くるかさの山風

風たいるこむもかれる湖のなかさそのすに氷る岩かけ

田〻　菴笑ふをもとちさへるれ山かせのおろしふく田面は

井亀　清らぬ山井やへをとまれなかたゝて出る波のけを見し

篠屋氷流結穂　霜ふかれ庭乃ひハ外を見ぬ出るひを冬やむも流るん

若川薄氷　かれてもえ末ふそよつる結ふあかの一夜のうまきさ有くるよ

神の山月ハ　新さゆる月かけしるかなれんこ海よ世まふ神のこゝろハ
冬ノ月　板まもる新田ん志ぐれし枯の庵のうへの霜よさゆる夜の月
さゆる夜のあらしに新をこらせて秋またちぬ月のあらなき
冬山月　白雲の光さわけて山のはふ秋よりさゆる月そかくやく
のきこゆる月よりほかの山のはハ雲をわけしまいくさゆらん
中の山と月の都の遠ふて雲と世ふ似ぬ冬やさゆらん
冬夜　秋すらてなるさよ何ゝなれん月の志りよ新よ堪ぬ夜なき
雲ハ雪の光よわしの中そさこは行る月そむまりさや冬
雪山　雲風も山ふ冷るらん新志めき月よりほかの山のうへ
霜のうへふみゝ光を又るさひおとしゆる枕の月のさむけき
寒閨　さゆるよも誰るさぬ玉まくら浮きとめける室の月新
松雪　つんる人やきれ松江の子次まま水るかうやまゆる夜の月
寒月照松　冬きてもなきさ尚へぬ霜の青けの宿ふ松の葉ふ白く照ふ月かな
夜衾　さまてよ柳るれを宿まく夜みくさいそ待やのあきて小衾
椎柴　数多く夕れ霜おきるひ山深の風るゆや宿きし山路の椎柴
山人のおのさ寸をとある川わしはをしき峯の椎柴
千鳥　行々ふ河へまるぬ山中の音の田すしひふ千鳥鳴くらし
夕ゝ　稲波の夕霜志ろき芦へより鳴音さむく立千鳥かな
霜白ふ濱のさふ河地さゆる月ハ夕汐まさぬ千鳥なくらし
遠ゝ　吹さわく汐風ん夕まふ波丈て河より遠く千鳥なく声
白ゝ　波あらきみきハを立てさゆる友をやなれそふ千鳥なくさ
小夜千鳥新をうにふぬ妻こふを霜と月の光さひ白やなく
河ゝ　むらすゝ鳴声を流ゆるふさ流の河音きめる月よ鳴行
湖ゝ　終夜つらゝふ志賀の濱千鳥見ぬめら行もとうみてなく

松本さそふ浦はに友千鳥れまでよまへてや千鳥なくらん

濵千鳥　あらいそに波をしのぎつゝ濵風のさきともなる友すまふらし

浦江　ふる里はわが袖くらべの波よせて夜千鳥の枕ならん

浮ゝ　志かむかしさぬ千鳥浮ねに波のうへにもうみてやなく

波ゝ　浦舟の月わたる夜を鳴かへて波の上に消て行千鳥かな

古波ゝ　友千鳥行衛もしらぬ池の辺の明がたひとりそふる波の海人

水鳥　池の辺の水鳥まつ心人の友千鳥浦にひとりて志らぬ行衛に

氷ふる汀に鴨の羽をならへさえてねぬるよもさむけさ

若竹もして冬さへしらぬ若鴨の青羽かさねて羽音八重なり

池ゝ　鳴くなるもさむし池の水にうかれてわたる八重ぐもとこそ

夜もすがら鳥静なる池の水に澄て音る

江ゝ　江に浮ぶ雲をもまてる浪はよるの水鳥しの毛衣

水鳥夕　池の面にくれぬるまでも遊びし葦辺のあたり波を深みに

鴨　うき寝の山はすずしき夏の山おろしさえて山風ならば

江上鷺　かけ渡し秋のみやびの江上に波のもどりて毛衣

芦間ゝ　住わびしと思ふるもやる冬枯の芦のひまの友を待る

網代　橋姫もさぞ寒く宇治の川風吹きし網代の床はさむきさ

おのが河人なき世渡のおもし宇治はひをまつよそぬるやめん

冬ゝ　冬寒さ志らずかゝる火のかげをもて志らへもたよる宇治の網代守

河ゝ　打渡す水のおもりも波と氷りてかけいさよふ宇治の川面

名所ゝ　ほのかなる湊の明がた火消ゆくそこにいさよふ宇治の網代木

霰　雲はれしき空にわかれて峰ひまで風の音とともにみえる

志ぐるゝやこれかいりをまもるらん外山をふさいあるれるし

野ゝ　さえわたるしかの原の玉や露をもわかれ　山風

草屋萩　草むらたえす萩のむしろと見る玉もゐにみえぬやいなつま

古屋々　故国ならぬ都のしのふ垣穂にふしまかせてける萩に

篠々　それとみむ人もや萩の花の錦の陰やゝいまた花すゝきゆかし

篠々　板屋もしる道遠き垣根の花ちさて都のみとりせわたるふかき見る

柏々　くらしてふ花のたつら月柏ちるぬ木の本の萩をと見る

紫々　こゝは花さゝつゆはなをしのをわかれたはしき柏木の葉

霰交萩　嵐ゆくまゝ夕まくれ椎柴にふる音てわかれのあとはすさましき

々似々　園のうちに降や何それのわか宿しきすゝきちらり交て

何かさこそれて　わかさちら思ひきと床の行いもりいぬ袖におちぬ

残雁　少別しものふしみれのたちひふ萩これて空に行なむ

秋風ゆきそれのこゝにたちぬ夕暮にもひせきぬらん

誰のしふ御法の月にはるてゝ其夜の衣ならはきぬらし

雪中々　雪ふきて住むはおもしろ入てむかしたれ初雪との夢

暖々　時はいまま冬と秋との中に見ゆる手れ明かのゆきふる

雨々　志らのれいの山路ふつち降る雨さむき冬の日は庵の板をうちぬれぬ

初雪　いまみん吹やまれにふちりて初雪のふるさと庭の朝のせ

庭雪　庭の面の行きを行とえなそちりてや消ぬ時雨初雪

水浴新雪　をりひしれと志かの松風をうけたれそめてつもる雪

松木にいつもぬれし中の袖や川ゆけにれきたえ志る雪

降そめて雪はつむ紫の山のかみの宇治の明灰

庭々　とりちへわるやいたみ陰ろうめてすきふりちるし絹れる雪

冬枯いさといぬ庵のわれはとるをあるるのとおもかけ

雪　都かふまか時きも降るれはふ深山路ら行こなたつらん

浅々　きぬかうへつきてすまん白絹ぬまつりて晴る庵の白雪

深雪　志ら雪の竹の林はおれふしてさきたつ松もあられ

積、　夜のまにつもりつもれるうちに降そふ今日の雪に見えしも

雪散風　吹すさふ枝のうつりぬ松風はおのかや枝の雪をちらさん

、似浪　波よするとみえしやまたも吹たつる嵐乃末の中川の志ら雪

夜雪　九重にふりつもる雪の夜半にみえてくれは夜の床やまたしろたへ

夜思雪　見るほとにきえも松と竹のけちめなくふりぬる夜の思ひは雪の下折
冬こもりなきあけ文遣へ向ふ雪の夜のなかめ城

前山、　月とみてやあまのとのまのあけゆけは夕へは峯の白雪
外山たる夕へにきえぬ雪とこれぬ遠くぬる山の端

遠山、　やその根をつきせる山の遠さかり夏にみやこの冬の雪をみる

峯嶺、　雪ふれや遠さかる山の峯とにてぬ吹雪の冬きえの志ら雪
隠るゝ雪にかくれてみぬ根の雪も冬かそへにこもり平野

園、　松にをれて竹にとひとひ冬きえの庭にのみ残るぬ室の八重垣
まつかそていつもみるぬ冬のかし里遠の雪の下にてそ入は

雪埋路　志らにほへかさこ駒をたとるまて道をもちしもゝ雪の道

野路雪　冬の雪に君とゆく夏の汰ちりは消にのりて行人もなし

海辺、　沖津風さむき夕の波まよりなみよせてなくなる雪の志ら波

湖、　蔵ひさきなるみもかはらの浦や一本の松の音の雪花

浦辺、　吹くた浪とらん浪風の吹たまたちそら雪の志ら浪

湾、　まちむかへる浦よりうかへるやへるあるそうつむ雪の松の雪の夕あけ

湊、　皆白妙き雪に満ちて溝舟志らぬをつき波の返る

都、　詠むる木毎の雪の山にふきこもや古ひはなの志ら雪
吹つくもかけの雪の日の花むさしやこはれのしもの山

洛中、　冬は文月の雪ぬ空のちまさに染ぬ都の雪のふ寸婦

社頭雪　はきの紛ふぬきさら袖とさむなかん雪を記せ神代の人

うつもれぬ木の間垣はかりと雪なとふかゝる神の廣前

里、　白妙に松も檜原もうつもれて波里ゆかぬ雪の明仄

何とかう外山ふかくも道もわかし雪降くれて志るき山里

閑居、　言海もとをより跡し花ならる三の逕をも雪ハのこさ波

秋をへ（や）情ハ残りけりきえぬる落葉をふりうつむ雪の庵

庵、　折つそ枝と二柳の冬の雪に御の本も冬も本のさき

竹、　松か枝ハうつもれるかとやみすかん竹にかゝりし雪折の声

雪埋竹　迷ひよく果ゆす竹もうきわけてすゝき山とつもる雪かな

草庵雪　色葉ハ志られぬ人もれぬとや草の戸につもる降れる白雪

雪似花　花と柳とおもかわりて一枝ハ真影もえへきかさね雪ぞ

松雪　十かへりの松のつもれる本末とや花ふ雪へふつもる白雪

松と、　起ふ枝より落て松のけふかくしかつもる雪かな

雪埋松　降つもる雪折れする枝あくてはさもてをやは松の村立

、新樹　小松ふかく一枝のみ見る雪を又有りし雪の松の竹

雪中獣　以つるほとみつけ隆の林をも紛れの雪まさる雪の松原

、詩人　今朝ハされ志る雪ふ跡ふかくすも居たりへき雪の下居

、望　詩人とをひ跡をとつるかそて添ふ松も雪の下折

雪朝眺望　いさらん都の富士みて見とふ名残へき雪の明仄

船中雪　なきや名ふる波を末の松雪ふかれる海こし山

雪中史瞳　かきてふは雪ないとひてわけ紛ふ波やさを松の人

、旅行　野と山も雪の港れ雪ぬのはいつしかふりし入舟のつま

旅雪　海ともんても行けふかく旅への雪ふ里はんれ道や白より

老後雪　香ハ見ん松ハのさるは埋れて花ふ有きぬみやしかる一首

雪に寄りて　白妙の雪にふきよる袖はらふさハ猶にも雪をはらひて

朝鷹狩　あら鷹わかやりくるゝまゝ野のゆふさに袖より鳥もたてぬる

雪中ゝゝ　出る夕ともとは雪もや野べにはしるひしそゝるもたけひの袖

野ゝゝ　みかりのやとりに日すゝ袖にまよへ雪かゝりともたやまよひん

狩むへきうけも交野の片野に狩場の袖の風で立らん

狩場風　暮ぬ日に立そへらし狩衣ますかくおもし袖さむくとま

ゝゝ霙　明るともみんなみは見それの狩衣て今とつくさぬ小野の狩場に

ゝゝ欲暮　われ行ハやそて一夜のとまり山柴かりつくさぬる鳥立を

炭竈　立やりてなひく烟に山さむこ(とさへ)わけ谷とかる小野の炭竈

ゝゝ音　小野山や谷えしけきの雪はかれ峯の炭竈

ゝゝ烟　冬ざれし立のほりてや炭竈の烟宿しく小野の山もと

遠炭竈　山さむしき烟をそへて峯ハ見えぬ小野の炭竈

深山ゝゝ　冬ごもりおのれひとり深山の山路のつゐ木こりて小野の炭竈

埋火　かきおこしおきてひとゝなる何をそ人に示さんハ埋火のもと

文ぬるうちむかしげハ文字うつのこりあかし夜半も埋火

深夜ゝゝ　寒き夜のあはれにさして臥かくひとり埋火のもと

向炉火　埋火の光のうちにむかふ夜半に書ふみて語あかすらん

思ひかる夜もすがら埋火のあたりに心ゆき灰をかきて

神楽　猶絶し雲上のうちかきあらし神の世こそ思ひハ

月とつゝいふこれおゝ夜の庭にうつるや神のいさむらん

住よしの松にすゝむひと柳かけさかき万代の声

深夜ゝゝ　神楽のむ庭志ろさの鳥をとに榊の声

佛名　ゆふおろかさの声の内に一年のつみさえぬへし

早梅　冬ながら野のめにかしも梅やすへ春のさそてつんすらん

咲しる冬の木の梅のいつくから春やこちて咲る一えき

年内早梅　春近き中地こえて行く梅の心は此花なるかなと匂ふるん

年欲暮　のこりとて數ふる日も何ほとの年の内なる春をや待ことにせん

歳暮近　さ夜ふけてしきりにぬる君はかのいつもひとなき春はかは近き

都歳暮　都にも忘れぬ人のつとめくに春待えしれくれいそくらん

市〃〃　多く家に売る君やこれ心のわすらの市路をも暮行

家〃〃　待初にし云ひやかりける老の里をいまだ迎し年此ほとりに

歳暮梅　行きの年波と共て咲梅と付枝は春誘いさそふとも知らし

老後送年　老の波くふれめともに行年波る身の老ぬのや又志る

依花待春　けのめかす花に暮つる年も惜めて春を待しもとる

除夜　様のうちわしれまやそへる折梅をやくも春に明んとすらん

冬〃星　行める日もれやうつの歩夜みこよしに冬の中に暮れたく

〃雨　山やまに君志清りし都みいととれなやて曇るおもなる日たる

〃風　吹しきる音の雨をしきし荻柴をし都の木末は風まさりて

〃暁　さゆるも名にも月に埋れて明くる霜夜のさゆる寝覚かな

多く家の暮君の袖さへに霜をおきつる月にさへなる暁の床

〃朝　霜をしる光をさして朝日かけ峯とはいへ都のつるひ有

〃夕　夢さへてめふらんぬ夕暮さひしき霜おく山の入日のかけ

〃嵐　ひとふくわたしの音の山風は夕されは冬なりけるし

〃地儀　里清の里の水河をおゐて霰路も寒き人もかよはす

〃夜山　春日山夜の神さひて神ぬる霜の跡やうつるらん

〃園　出羽ぬる夜寒をさえと氷くきの里のやうこに寒る霰

〃湖　氷の上の嵐も湖に落えて氷わたし吉野の寒し波

〃濱　末わたる沖の浪いそし吹上の浜にこほりせいゆる濱かせ

冬之獣 ぬく人のこゝろもあるを何の心ひかるもきゝぬなましかれ冬之山

一馬 冬枯はあさりかねてや若草の春駒ならんかへのわか駒

一新枕 若草のめり初若紙十寸鏡見えし世のみならずよりわかれや

一述懐 枝の若紙なりしてふるを嘆きん若葉の花の春を頼む身

一祝 友千鳥八千世の様をかぎりなき御代を待して我かな君ん

一とせの光をくれしこそいまだ少しあらんと春秋の道はゝく

恋

初恋 人を見てあやなく心をやつし始めし人のなかなか恋のはじめは

始めのかゝりに恋てふものの紙を結ぶ妹とにくさかなる花ぞしき

つましなきの路かしくちうしなみをのかあさく人にそへし哉

未言、 打あくまでひかへいやれどもひとはへまれの人めを情あるかな

忍未言、 明ぬとも思ひ定し年月の長く流ぞすゝる打くたえ哉

それとなく何あるまじなせし池の思ひいまだぬすれんを

中なかなる思ひやみえん忍ぶといはぬ猶うき岩木ならぬ様は

いひいでて いやましにつきせぬ我思ひいかにといひはてゝ

浅始恋 清むまでおもひしかどの思ひそへ人知つるものゝ露に

ましかしもあれ其思ひけなむゆゑつる袖の志づみ

うちつ中にえならで心ろ思ひひるまいてぬ人やこそあるせ

言出恋

あれ身をさきもせぬにつゝみこし恋の色やしられけん

浦かりし恋やはんとぬおもそいかにと浦くむと思ひき

残りかしくいふちにて日月はこの涙をも似たれぬ

人をこそ恋ひも恋しき文字紙恋ふ手をとり思ひの程をや

ちそてやさしかのあれや思ひきて思ひはまきぬんつよさい

悲、

志らしれまつゝ恋の人我身もいやおもひはなをしらぬ

うきみと思ひ身にいあるもかくてそ悲しさつへきそいたいりの

悲久、

ありきてや歴をなんおもしかおもてつむ涙いたこそれなり

涙もふれしをめんとてさわり悲しむへき思ひはて

悲涙、

年もへぬうちかぬ中れ思ひ後へかのさきの数くせして

涙しきてつむ涙のそてもれいたすむしへの此をとめつる

せられへまき身をあられ世にこのふんと神のしらみかして

共恋、

涙をかりれもおもむかれいんしをこんおもふぬさあふ人と思ふんと

我をこにおもふやけぬ[illegible]もなしよらふ[illegible]しのんてへ

相思恋、

涙とも思ひの山しかりへきんれそちのおもくる

堪恋、

志るもしれるたれをてゝ年へぬる世にと人をつむ思ひ

聞、

おもはすゝ涙せしもうれえかしおもやいよんのみのんたさ

初聞、

うれ身にもは志う涙をへき人の世をも何のえかしにまもとらん

時々聞、

人まこまち遠山とためをうちしさ友の[illegible]しの[illegible]

聞久、

あそ涙をいとれしゝ河との月日へてことれわもの[illegible]世涙

久恋、

恋を恋し世いこうきの年月ふく友きつゝまれ[illegible]

伝聞、

まつかゝ涙やてにこひめ道やるさと河き明石の波をかけても

見、

見んまもあるぬおもえさら涙あのりとあやかく[illegible]

未見、

あをひ霞の友ちすきしかもとも花さのかけし志らぬ[illegible]

僅見恋　明がたのおぼめく花のをちこちにかけるさかりのかほよひとひゞう

絶〻見〻　あやなさはみしまぎれ被とて言ふに雨のけ

見ぬ人恋　世になりし袖のこなたにまた見ぬ人恋しめかけれ

白地恋　何とかはうつろひなん思ひ初めしにさゝぬ袖のなみだなれ

[illegible]　袖いかりけん妹しふるおもひかはかなき袖のなみだ落ぬを

[illegible]　年波ら見一樹の陰に文字の雨やとりし君の乃れぬ世に

[illegible]　なりきて祈る波の名に難波江に芦の葉かの夜ちよに見次

通長〻　なれてたのむも中河に何なれ数ゝて水茎に流

[illegible]　薪ちりいはまんと数をみちら流すしれ神の玉垣つき

恋通出　かき流るゝ云葉の色りても筆をそ波の便りまさるれ

逢一出　かれそへてかぬなる(?)名は神の誰と云の中の深き

[illegible]　いかにせん言の葉かはし居るとおも見乃のいつき

尋〻　我もまた世を人の声は流れ下り行かん

尋縁〻　たゞいやれつれの(?)あまの月を契るとかぎる波ち紙

初尋縁〻　世を恋むらにくるる此武蔵野の君をそ見し袖をそ見せいや

尋夜櫛〻　筆を見なき声の君をそる尋ねる(?)浪ぬと誰そつけぬらし

祈〻　人われしの御ほん千とせを志やへ論あき道へのまもの筆くさ

[illegible]　ここ中に恋もいさむうたふとや神まへ祈りつ行らんまさらん

[illegible]　世ゆめ何人は志る波いのる哉にもちかまくらふ流を

[illegible]　いかにせん年経ていのるかみに坂の関の神のかしこきみを

久祈〻　きもいのり文明らかに神風にまかせしのにあやなみちて

祈久〻　かはく恋もこと葉をせし御手洗川の流れを知りて

祈身〻　鴨の祭の久しき日に向しているぬ神の志るしと給

[illegible]　うれ名をきいのりなる恋これ一年てあるかと思ふらんよいさに

祈難逢恋　笑ハ身ハ身をわすれぬ人ならハ我祈ることを神やいさめめ

祈不逢、　三幡の山の年月ハ杉の葉ハつれなさのかハ祈る身ハあらん

恐祈神、　思ひ見ぬ思ひのつきハ忘るゝハさりともあハせよ神の志め縄

誓言、　いひをきてぬるしひかなしてこそあれ誓ハ神もわすれぬ身をしを

笑、　ちかふ我まハ我誓いハ人の為ある世の中其身をもぬとも

籠居てもちきらしの世の中の我ハ人やまつと来せこの面影

人の中にあひ思ふ子忍ひる人の笑ふ子れ

笑ふかまきれ情を多のむよ偽とそしらる習ひに

人伝笑、　人ていうしろめたしや身の程しらて笑ふる中言かたる習に

互笑、　あひ思ひハ神代久しき笑たにもつゝぬ物と我む中哉

相笑、　かりたならハかきなハ悲しと消ぬへしかとかくる心なき一言

夜中笑、　うつゝハ我む情きれぬ中に以て今宵の夜かあハせし

忘誓言、　ちかひてしその一言よりけふまても忘れて我むなしれ

疑真偽、　神かけて誓いぬかハ偽のあるよ我さのむなしさ

不逢、　逢事ハかりてもほのかにわすれ身を忘れやうとなし又かく紀

あハれハいやとりて誰かれ身をとり我かハ偽めかせん

見不逢、　見るめなきあふ思ふ又袖ぬれて世の逢ことハかさ紀中ふ

別、　月の日ふつきさ見んとつる我中ハ別れとものむなしさ

相不逢、　きりまの文にきこの見あハしとハ偽りいてぬと思ひして

偽、　偽りとそ身をとし偽りよなりしひとつ言を一言れて

逢門、　さまとあるなをきさとみん身やいつそ別し人の其我葉ふ

待、　やまといて行きぬとも婦の門あきぬよ明かさう我かそれきき

とハれつる我ひに一夜も我物のまれ待情をとる我き

歎待恋
毎夕待、
初逢、
織逢、
尋逢、
逢切、
適逢、
稀、
逢夜、

今そとしく反実し偽とこまれ待おなきまくタ々の形
歎つらく我恋に行きとやうち月まどいりるて清き文作
いく夕さの田ぬもの待れんや思ひし年のこまれそろんに
おもう叔むと待てるいそてうる草ぬ新く乃ふは萩花みとしき
待えしは今宵いるる月日をおもひをこまぬ新枕して
人こそ消えてまとれ法のおもひあへ孔錦ひなしと歎行や
花れ根をこそるんをうぬいこつひあら恋れ山路さつゆく
袖くされの晩わしむま様よかきやう髪のこまれてそ思ふ
いそて久し夜をへこえしと我中れ新まるてにし思ふるなき
七夕のつらし紀例え習ふ宵の情くは語せぬちなりとも これ
人み粉うしみそのこるおふなもうへなまうし我縁田行と
あいにくはあやれいふすそすきとるき夜とゆらつれ恵めりて
いさ然しまこまれをかう鶉寝の夜れ歎りふ宵なむさむ

後逢恋
諸、
宗初宗悲情宗後語
隔物語恋
別、
欲別、
急別、
暁別、
惜別、

たのかしや袖ての胡の云とたふ思れ見ぬ夜れ見えし年波い
いそてかつる物と秋小萩枕かせいつきぬ中れもつこかし
んは逢へ庵そて行うのれ玉をこされうきをまれさらいくへのとして
かくふをまさとあふのまりてれふ夜ふ扇まつる園をとまつやかなさん
そうちる秋しあやしとわる我うなふをれいおすふ宿ら世をまさ
あさひ催ぬ文かたうれ逢すてやつとあうれぬ冬きの初嵐
雨けい成なしたまれぬ隔まされたとなへてをそうるりしつい
文かく文ぬうこいなしれ宵の田城わきあへぬ冬きれ夜つの袖
皇の色我相あそのふ居まうひふこまふ袖とまきやうまれ
小萩文てしそうこられい晴への書きへなるぬまる緑つてせやや
かくりしと明えん小壁るる夜つをさみれこ明の月をまさる夜
記あるる袖ゆきとおえてまるされ明りと志う波志なまふうれ

寄胡恋

こゝひ後ぬせ見て契りし中なるハと手向をめぐるさの名残

袖くらすの胡の佇身かへてあはぬなきれ手枕の袖

稀逢寄胡々

佇ハ厭ねそかさの又寝かな忘れのちりてうきを増れなる

身を師してゐきの稀な契れて又いはあんとちぎりぬるらんよ

逢恋逢々

いでそれ今一度の手向ぞよたなる二度めぐるをさかん

契りをいのちハ文とあまた後の関ちまきしく構ゆるを

なきや文ちうつなきひ由きそめてすぐ紙へとうきといひしかふ

毎名忘々

いとはしよわか思ひ瀬ぞふかきとおもふをたのも紀身なきは

欲世名々

ほそと秋き名よりかくれなりぬべき中とて世ふかし世の人とゞ

題々

思ひてかしうき名を世にいすかしんなふ人ぞそつくこなるに

口名世ふすくれ待ちれかせてもう紙いはれ實のわかき

扇をられしんわかけらん身の月押かさりしきみの後す

依涙形々

志られしと思ひし袖のなみだ河うき名を今は流へそかし

依悔顕恨々

あら波のこゝろそいたづらてなれし袖さへうかりけるかな

増々

うらみまよ忍ぶ紙にまちしなきや枕せめても今何ぞ契ひあらん

以下ぞもくや思ふそわりまゝ枕今はいと年ふる世をへて思ひ出る思ひを

思ひのちいやいたりもりうしとひ表といのちを人めうくくには

逢増々

新枕おもふなべきあさ契る身にうき紙こそれてもなる思ひ

以てうは恨をへそその思ひはへ新手切くれくは深ぬらむ

切々

なるらむ身を思へうらぶかくのも忘られて見し馴ぬ中は

消て出君表とうきんとふりれ思ひれ身の露をくるまきて

せめて人ありの走はひふつくしも忍ぶらん身を表るみんよ

厭々

思ひにへと成るまぬる袖の上ハ流しなみだやうきてぬるさん

忌忍ぶハやうたり人よかゝつるも忘名よ思ひて枕やいとはん

大方ふてる日数さしていかひとせんくらぬの君といひせん
被厭、　けていまう許と思ハんむくひまておやしむまんそふいとはれてうき
被厭後、　何ふらハ別るふ思ひそ秋草のいとはる露と消まなて身て
別悔、　契へうれ濡山本とそてとかくふきも絶てしとそぬ花咲て出ぞ
変、　以をくる君と契ふるうれ契ハ乃将いふ志川の水の色
漸変、　又見ふ契へとえ出夜はつるれ消まてはふ契さうれけん
絶、　うかくきものとも志るてうんしれの人申き中にある玉つさ
有妬、　秋の夜のうつり葛葉の根をハ吹もつきぬ風さへそうき
隠、　うしと雲知をありけりあと此時ようつかハりと方てかとれ色花
むまひ色のまれぬ宿のかふとそと衰ときし風の下荻
うれるまいいてあひてん関ちのうちと神ぬへくなる世なう(隠ハ)
兄まやも人名残せうるのまむ池も底かいえと捨てまあいぬると

稀絶、　うき絶ぬ情ともうしき玉のかやのゆう許そふまかるを濃いハ
為見隠、　内まして志れ契の兄しみの浦うき丈ふふ何寸契りありを
隠在所、　清カうれ名ハ我為ふ見えれのいつくしと志るぬやのう神山
久、　思ひある神代のまをれきめて何らハうれ陽の離れしや恨し
契ひ何わやれわか契志ら浜の岩そいつもて袖ぬるらん
うれ波ふ浩て三しの須磨へちせぬみるも今ハふのまん人
遠く、　今ハ世ふわるかと何るぬ形れうちをやてや契らしれを中く
道、　忘られても思ふまれての夜をたふ来る道れ妄やへうる
契ひわりうん此身をハいさるをうえてやなん宿れ中椎
隔海路、　海山をへたてぬものを武蔵野の寄そしよへる中れ思ひハ
行、　思ふされ人ハ契らぬ所をまるむくひと志らいたうりやせん
脇事忠か、　兄らやそこしや梓の追風を覧えれ吉をみる人なかるらん

侘思ひの
いかならん我行へをまたでなか中につらき思ひのたねとなるとや

被忘恋
かはらじといひしその言の葉ならはまし忘られたるうらみつらん

被忘恨
汲たえし忘れぬ昔おもひでゝ和歌のつきせぬ忘井の水

忘住所
志らぬやつれにけり つらかりし人をこひてとまらぬ今の思ひは

被忘恨
見し世をば思ひよし道のべに引やと見し忘れつる田舎

恨久
いたづらに風の便りを頼みてもうらみてのこる水茎の跡

互恨
つれなさは互ほの恨み大淀のうらみてのこる水茎の跡

恨身
あかずして人ぞうらめし我やはとおもはぬ恨をすぐしかへて

恨
まとゐりも見えずなりぬとかこちても人の恨をかこち初めん

夏恨
小夜衣かへしても我は見えん人を恨ても何かかこちん

恨絶
忘れぬとよりなほも中絶えし人にかゝらん恨ありしを
絶えぬるをかけしいはし恨みや人の浅き流に我ぞ見えん

春、
人にいつかはとふらひし春雨の春ふかみの雪にかゝる
世の中の花に人の浅からぬ年にゆかりの中や我ならん

春恋、
見そめつる袖の香ぞ添ふ初花の色をも人にかくさむ
今日ぞ山ふかき春の煙見えにけりそのあはれ思はん

夏、
夏の夜のうき人まつ蛍ぞかしやさらに習ひそめけん

秋、
志る人や夕暮しき思ひある身は大かた秋の哀をと

秋思、
悔の風秋の志のやぶすゑて置く露やけしきを
秋来れば絶えてのあはれ増さる袖の色や変らん
穂に出る尾花が袖のふかき色も忘れぬ我ぞ恋しき

曙、
心とめぬる有明の月の名残にたえぬ人のつれなき
世の中はよしなくえんの月の光に誘はれて

暁、
別れ路のあかつきの鐘の声ぞ悲しき

恋船　待わひぬ夜床さむしれ相のしてたとえうゆかえぬるとうき
昼恋　うれわしさつゝまんとすれ身をさへもるなと人ハしらぬ袖のうれ
夕をも夜とも待し思ひくらしかひえて袖ぬもりなりせハ
関路、　逢坂の関に行くれうき名こそなか〳〵に絶せぬ岩かと
忍せきや関の杉村かかりて来し車のこゝろをとめ
河邊、　あはれさぬ君をとひ来て来ぬ夜半川そこ絶しおもふ身そうし紀
故郷、　思ひ出る旅路よりま故郷のさて板やれ〳〵しきの夢
山家、　なすかハいやうき浮世で山里に住をしむ気ぬんさし身ハ
いかなる道や山里住の杉しけ世にうかれ人のこゝろ恋路かと
旅、　おもハさや独り国のかさゝて帰して旅なる身をいかにかせ
人倫、　夏かたに定めぬ人を人倫ハそれたなく年寄にしおもひけ
隣他人、　志らしと思ひまさるハ若かりしも絶かいりて思ひたへき

後見　人めゆかさひて見るとそ夏なりハなか思ひのみ嫌しぬ国し
桐村の友霞　恋衣たへはて名残夏ハこゝかなひ待さめんかくるものられ
おもひ出に　新ゐてうち来しなき絆かもえハはや花もなる時をもむか
恋越名月　千波の恋そされの船ね妹まゐて来けり夕月白ひの
恋衣　恋衣うつ朝しみえんをも見まさぬさ身にへさうてかなし
、舟　えかしう紀若かあめのされ名きや清かりぬき中かかつをと
、燈　思ひやつれやえんえん袖さらへて打あかゆめさるとす大かれまき
、水鳥　ましほの水鳥笑ひりもきぬ身かくてともしては何事かん
寄て恋　とも文出さひぬ夕やかそされんなもしき思ひかとはまかちに
めくりあふ道ともあれ人をふ天それうき橋のまさてゐよりし
寄日、　あたかやとおりし人のめれやんぶてる日もみんすとちゝひ争せめ
寄月、　我中ハ名残くる舟の月にふかくふ在れ道やなるらん

新やとハ月ハ雲ふとひるさん花やまちとんよよ袖の涙ま
あちきなくこそぬ月秋かけちてとこいかひハ今夜さえ志るらん
人志れぬまつむ涙をうつ袖ふかきあけてやうら月をうらみつゝ

寄月恋

涙よへ曇きぬ袖やうつきぬハはやく流れ深きむらん

寄星〃

今よりは新たる星の大空ふとて君思ひの数をもくらさん
かのえしハうまれのやとも多つくのうけふ思ひきれてよ逢ふや
ちかくやまちこなたの夜ちこくと星のまきれハ流らわうしを
うつ中わかみわかれしたれてハ又もあひみぬ星逢ふかなきを

寄風〃

今よそ風ふさそふ道しつらハうきされ心ふ君をたのむし

〃雲〃

我思ひはもとも人のとるむるよりかきさん山の雲をれぬよに

〃霞〃

又ハつの衣のすそたの夕れ誰今ハ恋る峯き雨かな

〃雨〃

志らぬやとぬれそとふとりのみ雨さそひて晴ぬ思ひそ

〃露〃

打志をり涙ふえるさ々枝香露の花ふと涙をまきれ船つむ

寄雪恋

まひくの雪ふこりかし跡つけハ我思ふかん志られんとうし
ためせよわすうるさ夜を志らてまつ志ともとのなふさえん鶏なハ

寄鶏〃

いく夜はふさ川夜ふるまつれ鶏鳴る手いつ別くのそらふなかん
夕暮は猶えやまとしいつとも待つ夕暮の人待ちひ君やうかな

寄夕〃

明けそふわつしれ別れ恋の山ふ田るとも恋路ハ
いつまれハあかる涙しきれてつらさの山ハたちり来ぬらん

〃山〃

人ハよふ情も志らぬ岩木山いひそこうきむれなとかし
よそみつもふじや富士の根恋の山をきぬ思ひの数さへよ

〃谷〃

いそぬるの谷ふ深きやうるんまもてそ人ハ年ふれ山
咲てちりの花の谷しハこれ谷深くきむもも人ま恋あひせん

〃関〃

人ふ知らしいそうるしハ谷深く又てや志のふ関をもたてゐし
かまわるる君れ猶をとひえてそちら涌きりせし思ひへの萩

寄杜恋　柏木のもりの下くさ老ぬとも身をうらみれ社やわすれてしかな

、林、　恋ふほどと思ふもんほどいつ山の林のうきふるまてうきしうして

、野分、　恋しひぬ秋のわしられましく野分へ身てゐん

、関、　逢事いく夜を夜ふ隔んうくせ関の波のなかれもしそて

うち数のわつ田ちなきぬ人の浪ふ我をなき人れ哭のせきもる

若ききく中ふわくふう哭ぬへき夜れをかなし身ふのそて

我ものいわか仮山もう記名をもちきく人のれ笑いわるさ波

、橋、　中将の久米の岩橋何ちうもはをさくもし笑するん

くれやを　朽せぬ橋の名れなりしてともいをぬ笑りい

、水、　我か中いさのむ出れ笑うふむくひをぬ井の水もる

、河、　織女もいきぬ中の逢瀬をもせむて明れつれ川浪

水いたのなりへなしてや天の浅河のかれにれ消なへかとも

、湊、　波さく袖ふと涙いく波の流ねなの湊の名れのこをて

、海、　おもふぬ我を海へふとや定しもんなるめなかぬれ笑い

、濵、　吾れ住里の志る人を吹なくしれ我なくはの浜風ぞ

、橋、　かひくやと人のなれりそうるそんむいくこの浜のおもて身ぬ

、浮、　うくみをや人のん乃二尺さい浮千にわするひいなくとも

、石、　うこ記れしたん旦く光くつく記我をもこ千尾身れ名の引ぬ身い

なきふ手哉の石といへるれんつくさん我うきかさ浪もを

、田、　始れ田のなをふもん人やといかん我しなるこれおとろきんい

、門、　おもしえしいくなる山の奥まてと尋ねもゐん秋まてる門

、戸、　さ夜月いと浪て尼もしふ柱のたれるしあけるれ我名の髪き

、井、　猿ひんみもや浅き山の井乃わてるも人の身をてらるれ折

、篭、　梅かゑやといふ身れ詠めまり新帰と恋のつめと成ぬる

寄定恋　思ひ定て後の道は逢見つゝなと人に知られぬ中をちかふも
よりそふ柱に別しき人は我と定れ中あるかたことはかなも

、床、　別を秋のなみたに濡る袖の床はうき世をなかめあかさん
とこなつの枕は独ね待て夜すからなけく床の梅妹

、簾、　明そめし月影のかけ洩る涙もうつる玉の簾や涙となるらん
こゝ活をみのこの簾かけて涙かよふ道は何れの方へ吹く風の簾の内まで

、草、　いまそかゝる思ひの露の草の片葉もやまつへき我身すゑけ
あさけの露の草葉に秋の夕暮をみるもさひしき風の音もなき

　　　　知る人もなき草の下に隠れ住む身の心にもにすまゐの程を思ふ
思ひ捨ぬるこそやすけれ我をかへりみて世のうきにまよふ心をも
たのめし草葉の露の夏の日に暮るゝまを待ちぬるも恋しき思ひは
深くなする思ひの末は夏の夜の草葉にむすふ露の命のはかなさや

、草別、　ゆかりさへよに結はれて世の中のならはしやあはれ思ひぬらん
、月草、　恋衣月かけ染て月草の色をあはぬ心の人やしらせん
、蓑、　あさ衣袖の浅ちふに風吹て世のうき名の月をも小簑に身をいふらん
　　　　いへをえぬいそはたゆたふ山里も爰や風吹やせんなとひとふ
、簾、　我をうらむるこゝろとしらぬは忍ふ心の中は玉かつら人にしらせて
、浜縄、　むすふともいはん浜の縄の浮き世をへてかき浜は人の心もさらす
、床、　人は寝ね夫をまちぬ夕ぐれは松にかゝる風の松風の音たかき浦
　　　　あかなくは何とか浪の立ちよるも床の枕ぞなきそてたる袖の涙の風
、木待、　こゝにてまちつくる雪を秋にする木の下は忘らんとやなんや定めを
、花笑、　ゆかりなるらんと見ゆる桜の花ゝ浮あるふうつろふ花やちるへき
　　　　咲りしに思ひは人のまさに忍ふ川ろかしとはいちきやとききても
、花別、　しられてはこれをかたみもあへ袖の花にかまされぬ人のうつりけ

寄松恋　かはらしと山しと清るにわたし波こそ黄の木かま川山

、桜　いそて今それまつえ三輪の山なる檜原のまそれ久我
きしある袖に田子て舞ぬる人やいゝ三輪の檜原なし

、椿　臣皆の此に玉さ花の支なしてみれはをはぬ人の面影

、宿木　補とる守いなしやゝきの杉の子そち有る木のこさへて
屋とり木のゝ子笑とこいりを深山の蓑のこふやさかまん

、郭公　まつしかゝふ夜半の時鳥おもし填生の声かかしくて

、水鶏　せ悦ぬおひ路ていまさぬとのと清きあと夜とて水鶏か

、鳩　ねかふに我家鳩の声さし悦ぬ目ていこしとかすふ夕よ

、千鳥　清かさゆる友くれつる浦千鳥歌く台の行にそきかむ

、鴎　にかる此友なへふ難く水底よりてしみも原いゝあまりめ

、都鳥　補そゝる名の難波の都鳥とありし人の事待しよ

、鶴　思ひのを袖に長河の袖にくみてはれを鶴跪此ま尊と明るする

、鷺　姉よ冬日のんいあくぬ白鷺もみとると袖に行それやおらさき

、鶯　はる鶯の此声かくとめにいかんて日にいはゝ竹は恋に何の聞き

、虎　父をおそる師守深山ともいたゝなとてと恋あるん君を

、猪　すゝちとも守ると忘ぬ所ましくよかりもかくれ人々にまかん

、蟻　なかとめこ夜るゝぬ国の蟻なみく袖をもおはれといきしけ

、促織　我も子いくかむしとて長き夜を独ぬる身の決意にもゆく

、蚕　桑子にま尊ぬうき身のいとといふ哀なる世をとそへき

、秋柄　姥蚕此かはう絵をつきも君やと涙を袖ましみ此糸にそ絶

、俱俱　かみ山むえいゝつるんめて一夜たえりとみる袖ちうき

、海人　うしやその里此海人と涙なりてみるめかるをぬわれ何さひ

、心　守しつはし世なれしまれんかそこけなきなすけの情と契りて

寄玉恋

、鏡、

、鏡台、

、櫛、

哀ともみもやつれて人にしれぬ袖のなみだの玉はなきなり侍し
すゝや人何をか露れなきわかれて其涙の玉かけさるへく
影をかすうしや思ひの十寸鏡かけてわすれぬ人の面かけ
身をかへてみせる其影や我身にそふ新枕のうしろ
人をいとはしぬるもわすれ夜の字かくみゆ文やれ侍る
別れをへてなかき仲文やらんこれとなりそきは
鏡にはうつれ侍るをもは身にそふ面影や涙ん
すみかうつる友なきよの文をかはしや恨み侍るや
十寸鏡ふかよみてよるは我をわすれぬ仲をも枕の上ゆり
身にかへてみる幻の中かさやうつらんかりそめの
跡もなき思ひかけや成かん鏡の袖かけていひしを
侍しておもひをそのこゝんと法常のみへ[illegible]手に

、髪、

、枕、

、衣、

、秋衣、

、紐、

、給、

其名をきえ仲身の中の侍いかけなきわれ行法をさかも似ぬ
絵かくいそろりや秋の方もん寝る人をあきれ古き枕を
うつゝ秋わかれて後の思ひ寝の髪かきつの身すかゝり
とはぬ夜の中の涙の枕をたかき夜の思ひの庵なる室の枕は
涼きてとらへぬ身の恋衣見えてあるの袖たかんと
まきしらむとへしもせむ髪とも見る夜の衣のうまへ契りは
あちきなく枕のまま面の名や思ひうみても夜の夜衣に
去年かくしむしき秋衣も世かくへ恋の人をかたらふかん
かけてあかしてこれや入縫の中まてしひふかりの袖を
夜の中の契を人を思ひつくは給かへ思とえんて我も根に
あちきなや仲をかりかきえてまえし根の中やうへさかり
まもれるをさきひをうつるかなし法の枕ん仲われを侍りて

寄硯恋

すゞり箱手にとりつく涙をも硯の海の流しとや見ん

いはぬまゝ硯の海の水茎も君に時雨ぬ日ぞなかりけり

契ひあればことの葉を友ありて見る石なまくらかゝらん

、筥、

来つゝ見るかひなしと契べと恋侘の折りて忘れ行すゑも見ずなる

うき節のたえぬとはかへ竹のすゑよりかくる言の葉やこそ悲し

、弓、

身にそへぬかひもなけれてあづさ弓ひくひかたかなしひく人もなし

都へしとてたのむ我ことによりあかきりや書え同つるを

、綿根、

ゆきかよふ契りしあさ行年あはぬは根と忘れ

、撫子、

なでしこのとこ夏の名に我にかひなき恋せん

、手向、

ぬさとりて恋の手向かけつゝなるべてみんゆくすゑをやいのらん

うきぬべき我とのむかしに思ひて神に祈れる相坂の山

、船、

まつ人をまちもなれ行つるにちぎりしに人のこゝろの浅くは

うき身の人と逢ふにはこゝろ我の手のこゝろ見つけぬ

、筆、

袖の上に君をしるへの水茎のつきしにせきもしのばれや知ん

、斧、

ころ恋の山路にふりし斧の柄もくさりて人のこゝろに立よしも

、答箆、

[illegible]

、鞍、

[illegible]

、貝、

[illegible]

、名所、

あふ事はかたくて井手の山吹のうつろひぬるもいろぞ流れて

雑

朔日圓如鏡　はるれ日のむかしにかゝる朔かゞみのかけに千世れの影はみえけり

星　一と世紙に光りつくして高き星のかしめにゆる道は半ばかりし

残月秋冥　秋さびぬ月と生涯の秋ふけて哀れむ白河の関

風　民をなでし一聖の道とのかたし南の風の時しある世に

野風　見し秋の野分に吹きつくし地に花の風はめぐる地へ分れ

松戸夕風　こぬ人を夕は松の葉しおれは靡れ来たる嵐とも吹

蒲菖嵐　菖蒲かる庵とも隠れたるやわらしの末の松の松の枝

雲　それよりと見し世は神代久しの天に八雲の色続きつゝ

暁雲　夜深しと見るからちかる横雲を志らむ光をかくさし山の端

曙々　横雲のわれや見しと一節ぬる引寄せみ色の明ぼの

朔々　まいらするまれを見んにかつらきや立つ霞む花の峯の白雲

落葉雲　時雨くふうつろひゆく色見えて落行一葉も雲ハさだめぬ

嶺〻　峯高き尾上の松の横雲をかけて出る一節

鶴のすむ千年もつきじや高砂に見する雲のかけ橋

巌松帯雲　一節ハみねより尾上引て松のたえまに雲ぞいざよふ

嶺上暁〻　たれぞかく高根ハ見えて志ら雲の枝にのこる横雲

澗底嶺〻　いそぐ夕出るや谷の戸ハあけてまた出る雲ぞかゝらん

朝夕に雲のかゝる峯を越えてあれぬる谷の戸とや見ゆ

関路〻　旅衣立出て今ハ山路に雲をわけてゆかせる

関路暁〻　急ぐよにおきて行く関の戸をあけぬとも見ゆ横雲

雲浮野水　時雨ともなく野沢の水に雲の行くるゝ

海上雲遠　海てらす山かげや雲ハ沖の里の浪に立つ

古渡雲　幾夜かゝる横雲のかゝりて渡の川つる

朝雲出嶺　さても出る雲ハ峰に朝ハおくる

秋雨　おつる雨に秋の山ハ雲にかゝる

関路〻　名残の山に関のある雨に行く人

渡〻　行人もとまりぬひとつの雨にゆる里の中

遠村〻　ありて行人見えぬ雨の村をとへる里や志るべき

旅路〻　山路行く雨にぬれて旅の木のもと宿やかる

雨中忍昔　いかにして昔の雨にぬれし袖ぬれて

落葉烟　夕けぶり吹や風の木の葉もやく山の

孝村〻　立のぼる烟り山本の夕ぐれ

枯野の里あるも山本の杉へたてつきの

村〻烟　いく里の夕けぶり海を隔てゝ山のおく

海村烟遠　沖の舟の雨の夕べに浦風ぞふく

塩屋烟

たなひける煙もあまりけふしけれ海のなるみのあまのとまやに
出るまゝに絶ぬけふりの塩やく袖の中間もきえぬは浦のとまや

暁

ことしあやはひとつのかねのしのゝめのほのほのと明ゆく寝覚かな

山

雑役へ日数けふをも過ししゆくかひなく神山の志るしの鳥ゐかも

暁山

月のみてむかしのあとを世にのこる秋のゆふくれ山の名をなし
うき雲ありてたえすきりしかの山くるゝさきあらしのあさの空

遠朝山

かき鐵き月いくすみの名残して横雲なひく遠山のはて
冬ふかき朝のとりの声もきこえて嵐山なれし都の朝けかな

名所山

みさのなかの神のおもかけをのこるよし世にあらはれぬ名の山
山の根はいつもかはらぬ松かえにもみちのちらぬ名のみなるらん

遠山籠霞

春かすみ山のはつしか緑の雲かゝる遠山の春のけしきの

山新写水

あまの川なかれて波のやまして万代のすむへきこゝろのかけのみ山

暁旅青山漁濾遊

雨そゝき尾上にかゝる雲の嵐をまちえて見れは出峯の松原

澗水

あら水のおちたる流や谷の戸の水をせきのもとめやなれ

名所原

いれこ哉をかへす蛍ぬを見てなれ尾の松ふく嵐のおと

松

志らくもの外山の峯の松陰の志らぬやまの松の木かけかな

名所松

流れて世にかくるゝ松木の松をうしかこるなき春の花吹ぬ

野

武蔵野はひろき野末の草むらにかきりなき人の志るへたるらん

原

吹おろす山田の原の秋のたなひきかかる風になる

谷水と流や

朝霧をなくるものをなかれ谷のかやさゆる

関

せきこゆる人とかはるたもやゆふ松風の旅ねかな

関路

あふ坂はきゝて過きのゆきゝしけれ関の清水にかけやさめぬ

関屋
わすれ名やとめて行く逢坂の関屋のあらしの山風

名所路
こゝろをやめの中道古代よりいまも人を行りやかな

橋
葛城あたりのみちくはわたしに(?)の山道

名所
おやまよりの道を世の人ハなびくもの木曽の桟橋

水石契久
河の道をわたりて行せぬ名しの花やかゞみの州のまつき橋

泉石有佳趣
池ものまへき世をうつしわたりける枝かなきに

清浪輝
行くかと見ぬ勝もなきて見つるハ水と山と木深かな

清
行波ものゝかげにさそて春の月のうつりぬる池の面の月

清水流
落くるをも千年とあれハ山をもうつしぬる清水のみち

名所海
これもかれのうちにうつりひゞく清水の声の糸

松巌
拝みる海のすきうつるもわれ千葉茶の水に交て

松帯中佳趣
のきるゝ名もうちなきて入ぬる緑の塩やさるらん

名所里
萬代の春にあたらん梅つもや咲るかの花の名ぬれ

古郷
河をとりかはれて里の名の冬をみすむ住の山をき

草
咲かぬ竹の葉山の陰をつたふかやあかきの里

本
柏さへかわれとめて秋風の身かむかし住さの夜

嵐
おもきまやとはれ(?)にかけ給れわたりぬる袖

水郷
やつるもとほりのまの名の人にハよもに世に

仙宅
かへりぬ錦の年のてわれし新場の橋しりん

仙家勝趣
うちに河や菜つむみの行末をもしさから波かたくひて見る

卯の花わたりゆる名所のうちの橋のや布さかる

あさ浅るわたしの高松や新場のありや橋ころる

年経来て葉ゆらん仙人のおもとして世の宿の花つき

青松ふるしはこやの仙の人の月花に千世ハ色ぬへし

窓　身をたに出むひて窓の内の見えぬ[illegible]こそや語る

石　[illegible]の手[illegible]

古寺路　六月[illegible]道[illegible]山寺

旅　都の[illegible]旅[illegible]

〃　旅[illegible]朝夕[illegible]

夕〃　[illegible]里

旅行　東路を[illegible]山

〃　[illegible]海山[illegible]

〃友　[illegible]旅[illegible]海山[illegible]

〃　や[illegible]夜を[illegible]衣[illegible]

〃　[illegible]都へ[illegible]山[illegible]

〃　行つれて[illegible]人[illegible]衣[illegible]道[illegible]

関旅宿　[illegible]関[illegible]人[illegible]

羇中道　[illegible]の[illegible]衣[illegible]

〃山　月数ふる山路の露[illegible]起[illegible]夜[illegible]

〃関　[illegible]山[illegible]旅[illegible]

〃浪　[illegible]月[illegible]波[illegible]

〃湊　[illegible]湊[illegible]波[illegible]

〃里　波[illegible]沖[illegible]

〃懐都　[illegible]里[illegible]

〃友　起[illegible]

〃衣　旅衣[illegible]

なれし志はしつゝぬる旅衣つゆはらひかね常にあはれは

旅泊

こゝろとやうき世をよそにまつはてゝ〔?〕すさふ浪風の音

同夜

いく夜へて旅寝うきねをかさね泊り舟うきにあはれは浪にちるとも

海辺旅泊

夢をやいつまてかたりてまくらにや〔?〕とめぬ浪の音にさきに

旅泊夢

篝り火のかけ志れてかへし夢の名残ぬるとも秋のうら波

山家

峰の木のこすゑのかけに住ひとる所なき山の陰にすみて住なれん

誰すみし世をいとふ人〔?〕はうき住すてたる山のうき

きかぬ世から住なきすみ〔?〕ぬ〔?〕えて〔?〕友と住る山住

思ひ入るこゝろの奥にまつ〔?〕へては深山も浅きまことなれやせん

同嵐

山ふかくそ〔?〕たゝしき友〔?〕とて松風あらしのおとなかりき

同雲

すみつゝも山に入てもこゝろそ〔?〕世にあるはいたく〔?〕〔?〕

捨し世に〔?〕のかれ山かけを〔?〕志〔?〕雲〔?〕〔?〕ぬ〔?〕

同春

咲てちる花を〔?〕〔?〕やまかけの世に〔?〕春のみに〔?〕は

蕨〔?〕〔?〕友〔?〕山〔?〕〔?〕〔?〕春〔?〕

雪氷とけしおりてはくる春〔?〕や〔?〕深山への里

花鳥の春〔?〕〔?〕山里〔?〕〔?〕世〔?〕

同路

こたへしれなき世の〔?〕へて〔?〕車〔?〕山も〔?〕〔?〕稀

同水

波〔?〕〔?〕しれ〔?〕〔?〕〔?〕のや〔?〕み津

山住は世に入ぬ〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕

〔?〕て〔?〕世の〔?〕の〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕山水

同松

深山へは〔?〕〔?〕松〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕人〔?〕〔?〕〔?〕

同人稀

山〔?〕の〔?〕〔?〕〔?〕人〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕

同送〔?〕

〔?〕〔?〕〔?〕世〔?〕〔?〕〔?〕年〔?〕〔?〕〔?〕山住〔?〕〔?〕

同夢

〔?〕〔?〕世の〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕〔?〕松風

山館雲　山を郷とすミし我すみ流る雲に雨のまつ窓の明ほの

〃〃竹　谷かけハ庵とふる垣のミ岸にさしくるやさし窓に入れ竹

〃〃鳥　光さへ見しやつれゆきそめて老をたのめぬ深山かくれの声を聞ぬる

〃〃友　生をし世をはなれてたのむ山住の人に語らん友やあるに

田家　年ふりて山田もる身もなれなみもしたしくなれやともにゆかりある友を

〃〃雲　下もえし民のかまどのけふりたつ雲も田つくる里やかかりけん

〃〃烟　賤の女の烟もえ立くまむ居に夕のけふりの秋やまもらん

〃〃秋　民のかまとの年ある老しおもふの事ならぬ時やなかれし

〃〃鳥　かり流る毛せしうち鳥もなれきて人のちかくに山田の秋

〃〃虫　時ありとつくる山田の夜やさむ秋かせにそふ虫のこゑ

田家人稀　わかりて秋へぬ庵し里ちかくの穂むらに袖見え田面ハ

水草隔舟　かきませて舟ハうかふ芦へかりおさし浦なれて立竹

蓮　秋ハまた見ぬそてハ見えし蓮の花むすふ神の露

涧苔　むす苔ハ岩ねの垣根の稀なる人の通ひなくして

橋上〃　むす苔のなかにきれぬ板橋の朽ぬるさハ人をかよひて

苔深山路　ひとむかしハ人をかよはぬ庵見えて中〃苔のむす山の路

巌頭苔　のきしのぶの巌の苔や岩ねよりこけのころもまて

井辺　雨のうちハ清の波にうつる影そもふかき

巌　むす苔のうけぬ手をも払れや世にハいてぬ動きなき

　いつまでもしる人に見せてむす苔の梅の袖ハ

石上苔　山ふかくこけむす世のほの床にたれさへしきしぬ

苔為石衣　杣人のたつねきたし苔衣岩にかけて朽せぬ

路芝　ふみ跡やさそれ布ける路芝へ此辺よりつくもなれたち芝

河藻　夏河のながるる玉藻みえぬ蛙さへましろ舟の涼しさ

あさぢむの　瀬波をや流れし舟の一すぢにむしる根をや浮せん

江芦　これなやま芝にぬるやこ鴻江よ刈る芝舟のさ波友なるらん

水鳥江芦　時すぎて芝よぬるやこ鴻友かる浦みん汲みたる江の水

若葉ふかい身さりくる山ぬ継波江のこやまを寄さ出てく芦原

島際　河風ふきすひくとあふれ志る波のよする汀よ見えるもしく芦

行く人の外面の道ぞ見えぬやかりて見へて笹ふける庵

竹　隠れかく住ん竹の林かもすにりとぞ名やいかくるかし

竹風如雨　雨とおもし皆やたたまん月やかつ影ふくるき竹の葉風哉

竹風　漱きい分るかりし次記やにたまる影澄の中れまかせ

未分外ぬを松ふ萬るへのとも栽てさむしよ窓れくれ竹

雨中竹　枝たるとおもふ俤やこぼるらん竹の葉つたふ雨のまへつらさ

岸竹　きし根ゆうかれみゆるとさらに舟とかれ行さゝめしや靡く呉竹

岸江竹　岸ねけり水のうき舟浦ふれて竹一むら吹きなびく河風

この河の庵とおもふ岸やたる岩まなびく靡く呉竹

葦村竹　葦ゆう里の冬もの丈ふかぬ竹のおちふむや由ゆかし

冬ぬもの分るとて竹の葉隠つくしみどりに春る山もと

籬竹　出し出の色のうちにもの世をかれいかるいさう竹

あれうちの霜うち散りて世の中よ涼しく吹く風よる竹

竹夜分　ちる後夜らん此友とかし植て千世の分るや庵の呉竹

竹樹傍分　時いとめ桐と花もしその竹の千尋ふかける色紙まされん

久竹　来ぬ猶くみどり案のう呉い竹をなれきぬあいか世のためか

笑齢　いく千尋するためうきも我くれ竹のうきき数とぞへてかるよ

竹遐年友　よろ友とちかひおきてくれ竹の千世経かさねん九重の内

水樹多佳趣　鶴亀もともに住せて池水のいく千とせも松そ千世のかけ見ん

松　けふせしは世々の末まて契りてや千年こそ神代の松に契りて

松風　千世の数よろつよまても山風の木末にきこゆる松の尾の山

入琴　まつかせの律の音ならて人の秋はてて空にきこゆる　おりしもかよふかせ

暁松風　夢もはや覚めぬ枕のあかつきの松の嵐に声ぞ明ける

山松　冬さむみ峰の松をはみわたせは山松のみそ[illegible]

嶺松　八幡山あふく峰の我もまた千とせの松のときは木

松老浮水　塩みちぬ海辺おもしろみ見渡せは岩根にかかる松の

湖邊松　松たてる池の岩ねにかけ見えて千世のみとりの影の上の山

孤松　又やみんしつえを越えて峰に入ぬる孤の松の

松為友　数ならぬ身にもやあはれの久しき友と松をたのまん

松積年　松かえにかかるいはほも数しらぬ年をつむらん神代の友

〃久縁　万代の松やちよの神山にかはらぬ緑をたのむらん

翠松従家　君か代の松の林のかけの庭に植てや千世のみとりを

松樹契久　ちきりてはふりせぬ松の千とせも末かけて世をかさねせん

松有歓色　おさまれる時の風も松のおとにきこえてや千世をまつらん

〃不改色　深みとりかはらぬ色の松にかはる冬こそしるけれ

〃玉徒色　千とせ経ん君か九重の内にしも松そかはらぬけしきなりけり

岩上松　おさまれる世の道やかはらぬ石の上の松の緑の数かきりなし

嶺樵　きこゆるや峰の千とせの松の声八重の樵の斧の音かな

樵家久縁　かきりなきまつの緑の色ふかく山にすむ樵のこのすみか

桐　おなしくは桐の一葉もそよくなり秋の初めとまつおもふらん

椎
きけハ椎柴の本をちらにゆかりあり　ゆきけれはちれ山そなかき

鼠、
からひとのおもひをかける椎かまとある鼠にも休らひて行

蕭林
三葉末やまの下かけの羽をあり行て袖も露を便りし

林鳥
深きわへ沢鳥ちき林の本ならとちり行枝の秋のよ鳥

叢林、
志かし飛翔わたるに村鳥の林をしけき山路をこれ行

渡鳥、
渡かはる山の空しくと之鳴音の声をたよりし多年あへふ

河鳥、
これはる波に立数ハわたりけれて河へ立ちる行鶯れ一つる

鶴
白妙の濃れ衣紗のはりくと来て古手にし鶴の毛衣

晴天、
千年ふる羽白にあはれて年つへん千代に多年や鳴遊き

老のか為千とせを経る目新しや見れつるの雛もふかく

鶴鳴皐
まな鶴の声や空ちゝを聞ぬやなき沢へふに之鳴りなく

海辺見鶴
米倉あかり波寄き伝千深き有るんちれ浦つふ

浦鶴
たちりんぬ千年の数をとふまよむ心に寿々や和哥の浦鶴

住よしの浦に芦鶴声やまき霜にや露さきとのちも千歳遊ぶ

こゝやところわかし難波の海つるやと新らまちの千世遊ぶかん

たのみつゝ千よ世をすめの根をハ鶴まてや白鶴のなく

芦間、
難波かるかりをひて立わたへまこやわたハ宿りつる毛衣

鶴立洲
なつ寿をハもれつやはりにぬ見えぬ若人の友待るらん

年に經ん千世ある千世かさへてもいて寿沢のまろれなる

庭鶴
あつかりの千世をみてゝ鶴の行く松のけきき庭れ松地

庭上、
年へつる松をわけや翔ぬらん見えぬ洞の庭れ友つる

松上、
行くへり梢をなれ千年をもむつるや松かり巣たつ子係とさらん

鶴寿遊枕
仙人のあむ床近き居鳴し杉の峯につるもれくなり

鶴伴延齢
千世ある友き洞のうちられ仙人の言友つるや栄ふよいひれ

對魚争餌
池にすむ魚やたつ鶴代をくみしらんと笑ふらし

若竹鶴
和哥の浦にすむ若竹や君か代の松のちとせを待ふ
すむ鶴はよろこひやなとの世の海にたつ波のきこゆ和哥のうらうらを

曉鶏
夏の夜はぬ鳴やとりのうたをきかさるかはれて明の関の戸
ちくれの旅の鳴を鳥の音におとろかれて明る関の戸

関々
鳥の音やせきていわせぬ関守のうちぬるなやかなるらん
旅人のかよひて行の鳥の音に旅ね関守も目をさますらん

隣里
山もとの鳥の音出し其里は林のあるしの庵まてとかりに

遠村
鳥の音もなき里まちかくて其里の寝覚のたよりに曉の声
曉は外もなき山もとの鳥の音と繪の里の一ゆ

幽栖
衰ふる世をいとはれぬる寝覚にかはらぬ鳴の声よそにきかん

鶴
かはらぬ鶴の声をきくからの夜はかたも秋なやいし

竹裏雀
くれ竹の枝に待そをわかひて竹の葉分の夜鳴

雨中鷺
ぬれつゝて澗滴にたてるかさゝぎの若葉やぬれぬるあめやしいたん

江上鷺
鷺のやしろをたちきく汀の江の村のこもかけのかすむ雨の夕に

鶴
おのか身はまゐるつゝ千年の雲に過る鶴を志るとき

峡猿
さかしくて猿の猿叫ひ山かはますらんとおし志つふる重聴

念方遠友
志のぶらんたに友とすむ猿の此とさそふらん洞まちからも

晩鐘
おく湯のに入相の鐘は彼人いそきし峯の古寺
志の夕の鐘の音の内へ首行ふりの聲におくるらん

鐘寺隔河
山くれの鐘ひ松くや山風の流るまき寺の鐘よくひき

野寺鐘
いつも世の外をも字鐘の寺はやちる花の寺の庵に

浦舟
志ほやゆ浦風と縄く行舟のこれとまるぬすなれるめを

渡舟
舟人をおいれと見すや志ほ渡るのまるかぬ袖の

渡待舟　なせる似いつと海さん而まりに事も及ちぬ幸き渡りな

うらゝ舟乃　おきつしゝ浦さゝ而乃数ゑてまかれるさ縦れ波をまてもよ

春帆連波　浦さいぬとさ帆引つれて行るや而行し波ちれ河乃釣舟

島さら帆をまきむや沖はせ帆まかむきつゝ浪れ数まき

波ち納くさ帆むきつれて行ゆ帆をとさ浦風や任まむらん

松川筏　七月雨い浮るゝ岩木ほ雨手誠て庭ゆくそさん松の筏代士

釣舟　丈とさ思ふ〱や一葉の釣舟を入られあり乃行へそての

浜舟連波　おもる舟釣つれて釣ちてき帆乃おわし波を蕾てたぞぬ

眺望　きりれ海の風の吹しく波けりつゞき小浦や舟をれ山のそ

秋〃　入日さら川山をと墨んでうれ見るれの空をたる紀

海〃　折ぬ家夕れ秋への雨をさ見て尻わる浜山ゆとれ里

うきしとふ夕り嘘れて粗田の原見ぬ舟遊ぶらる波の粗

述懐　営ぬよぅうふ雨のけむやらんとの夕浜れ浮ぬし雨山

おみすぬ系れ恩を残居ぶれ及いぬ和弁れうるそやかき

取れとら残すらうりえいきるにくき世の桃いひい浮さいわれ

さ母ふ数しれれ空とつぶすき驚えんぬ君そっこちへ

寄花〃　年のあれとも宝のれ花い浮ぬ系世構ゆる木とい思ひまね浮

寄関〃　見れていぞ遠坂と志ぬよの立とかり見ある関ちあり

寄雲〃　なゆへとし居てやまけのと志らうき世れ実をとそえて

めれすへ西将りふりて行舎の世のおりさ母を人西見まゆむ

行すりぬ思ひの雲をなすうれある二前西いちててあるれ如りて

寄海〃　さ母うの道西せられて子ゆへすると海やつあふ肉となたを田

稲〃　ゐま和さと教れ浮の言をつ〱し言をやいる浮さわさ

ますひえぬ身西いお取への日々せいるわやまちとさまて色れん

寄秋〃　志き浮れとの道れぞやにまし〱西つへる志る色え粒の末すらし

寄縁述懐　なをたのむへきかたこそなけれいとふ身は老くるし(?)

同前　和哥もしはや後にさらに浄土のたよりとならん道のしるへそ(?)

寄道懐旧　(極楽花月回忌)そのかみにいひしその世の道を世につたへたる君の親とおもふかな(?)

老将懐旧　老て今悔のはしまりて歌よみ仏ならぬ身もしりしらすと(?)

〃　なしくえいゝたる世のなかきよはかれはてゝ[illegible]もなき身もしるへとなりて(?)

夏世(?)　なかれてもすてぬ夏の[illegible]みのつまにせぬあまりにかゝるあたらしき(?)

夏旅所懐(?)　あつさ(?)ひしきの花にまよへて[illegible]ぬ夏とや思ふ(?)

夏易老(?)　きゝて我しかとわかりなるゆゑ老の夏と夏のはゝく(?)

孤舟　このたひこの一ほふの秋をつきらぬこと秋風の夏をこらん(?)

暁夏　しるしふりこそ今わかるゝ孫燈の母ともしらぬまゝ老の行衣(?)

暁寝覚　老ぬる後おもはぬそめし孫ふりおほえて二十の秋のあかつきの床(?)

[illegible]　たえれ吉野うちしらぬ夏の夏はたえつるよしもなし(?)

市商客　うちはへしてゆくはたよりとなる我身にまれにいつる市人

樵夫　[illegible]たをれてあまりある[illegible]の山にある木のしたの[illegible]

谷〻　峯わかれ谷にくたりてゆきかへる道をつたふる樵人

牧笛野(?)　みなれぬ谷をめくりてかへる道にあかぬ夕への声して

傀儡(?)　おきかへる袖のはしをとて吹笛の音にあはぬ身のちからをしらず

岸孤(?)　何とかく定めぬ人に逢そへてかゝる身の山のはにやすらはん

宴遊(?)　池とかく文わたすかきしに松の陰にて行人やなからん

上陽人　百歳の世のはなにいかなる夜にすかゝるひとの志のむこの世

夜涙濡袖(?)　むかしきし跡のこゝに三代のむかしのそのむこの世をひまて

故友逢昔(?)　おもひ出のなみをそへてまたかはる六十の秋の世中

袖のこゝかるはかへる治をひてかはりなるの名おそし(?)

めくしきの昔を今にまとふかりける[illegible]にむかひて(?)

秋祝豊年　治れる時やゆたけき民もたのしみつきぬ豊年をもて
豊秋野遊　豊秋とこそ心に交る野辺の千草の花にぞ見えん
詞玄　言の葉のむかしをとへば一筆のあとのままなる世はあるべし
七夜　跡しきる君の七夜にもの徳の大なる祝ひする君を祝ふ
伊勢　曇りなき神路の山に杉を祈る末を継ぎてこそ万の朝を
大原野　さかえゆくその光の御幸とみし春は大原野ぞみ守りの代
いくよ雨のめぐみやこの世より大原野へ春あふぐ宮の内
玉津島　なみ〳〵の衣ぞ織りし光をや松やいくよ玉津島の光
まねしていく世と交に枕むすびのあかぬ千代ぞさき
社頭　跡たるる山城のこの芋あしたてる世かれし日吉の御社
光今は向ひ今は四十八ぬあふぐ神の宮ゐに
社頭暁　ながみの浜へは暁に月をまつ君が来ぬ玉かきに

〃松　よろづ年も後ある神徳にかはらぬ松のことはにぞ
〃祝　うきたるも豊かに三と世の年の向して絶えみちきた大和言の葉
〃祝言　三輪之山神ぞしめたる玉の宮の神ちかひ千世をかはらし
暁神徳　まつる代に河浪一筋に曇らぬ流の末やすらし
三輪之山神代の光今ぞてらす椰葉に君がありける影を見ん
祝　豊にさんやいはふ四方の浪風も治まる世のためやそふらん
君が代をまもる和光の神徳にいきて千とせ経む松の言の葉に
松の葉の数よりもなほことぞかぬ三と世の年の向祝ふらん
寄天祝　あまきける天の道をはしめて世に久しき末を照らす
寄星〃　治まる世を君まもりて北斗の居し南の空にいつも居る星
寄道慶賀　万代のことの葉のかよふ道こそ君の御成かれ
寄道祝言　今の世の神のちかひも幾万代末まで照らさんこの道

ゝ代の神秘のこ法を伝へきて今もくもれぬ道ハさゝしな

ゆるを悟る姉しと水無瀬山まもるひわるとれぬその道

寄道祝世

昇古ハよと引道を友治のやすきと言ふ君か代のことわ

寄巌祝言

さとえ子の神事を仰き洞の中にいまかゝきて巌の行末

寄松祝

ゝ沫他いく世の末そて巌かとさゝれ和之尺まいるてあらし

千尋まる松とし こや君か為にいへてのこう君世ハ我そうたへん

寄榊祝

君代と祈るわかゆくせとさらなか繁来まれ神ぞ恵をも

君代とうきても楽に春秋の来やまる御法に君ちの川

教うをねあしときの高御の松そ志る人世をみむなの繁

八重法の紀いくぬむの恵の心のるあさまれ大和なれん

とこしまに志る神代のうし山を見へいかねき榊の陰

一世、

民もあれへて治る姉ふと世に知るそてふ今いのるとは

勅さすな世代しふ世も大治の神前見る有の治れ神

寄民祝世

君か代のわせかひくもそなけゆるむへあま国の家かよに

万民祝

雨えてまむ田民やたのしされ浅治ねあるまとそ志るらん

寄神祝

八祈の御恵をかれし春あそむきつゝ末店ふあかく君か代

寄神祝言

いく千世えるゝ神の葵ましまふ光残あらく君治田山

幸道太平代

てら千なうしゝのむむ春と今名おふなりもあて治まなむ

世治文事興

治まる六十餘州の君か風あのむむ春文やよまあこつらん

釈教

まれすしとあのむいふ紀そて田山世代ちて二法れ言のを

如是作

秋すちて花いろく人の面有今まし経の外やいさゝそ

寄水釈

舟をふらうぬねみと法のみその海よ入るハ鹿ね志るま波

寄衣釈

国さむき夜の衣をぬきてあら君の恵みて世にあふひらる

老しいをのまるきぬ夜かう浦ハ人を法の衣手

寄枕新
ぬるまに世はかはりけり他人のあるひにかたらふ花の色もうつろひ

思
時の間に思ひかけてあるはいつの夜やたれかのかなし

旨
いかならんこともよし　いまはけりぬる山ふかき紅葉を

妙
去りゆく草の上に露しく小松原かきわけにのこる木の忍は

視
花すみち月よ君かともなす(そて)をふもとのあとへぬ清かりは

新
うき人のたよりをまつかいしてかりせぬよるは老の道

ときはさ
とはれつるきぬのたもとのむかしをおもひそめし君をまちわびんとする

常盤さくら
夕かけの木かけに川る秋のおもかけをみちかへしおもひのたえ

音羽川
音羽川ありあけの山かせの音風や君をたのむする浦の氷上

西河
千鳥やこの河よ吹きおろす冰をとく川のあき風

芦屋里
有明やあかぬ芦屋のまつ風に吹きすさぶ花をぬらしも

芦屋里
おりてみる芦屋の里の近き人の波やまとへゆきてあるあさま

和泉
篠田杜
世はのうき世にたえぬありしを志のたの杜の森夜や木のはの紅

山城
美豆御牧
秋のはの色の景色の月をかりそめにおもひこえては

音羽山
郭公さこそは一声ありあさひとの音羽の山よいつもひとめり

伏見里
あひみしを夏ふかきたのむ伏見の里の名を

難波山
名のみにして人に二度のたのむ伏見の里にかへる夜の柿のかげ

不尽山
つきなき月を家にもてはれけるや富士の人へ見ん家のたかさきの山

小塩山
又さくらひるかすみに見る所に二代の根の世よおもへば名はいつのまにかありなん

田蓑鶴
たちよ山これや昔の小松原ひとつる君にをしへの木のきさき

象
雲をわけへなにもちてらんぬれぬへし田にのちの鶴の毛衣

享保十四年広南国より関東にのぼせらる象
禁中に参入りて御覧の時御製の詩歌被出臣下献旨
めずらしき都にときの声やまとにかなふ北山にいくちりとも

なほ常ならぬ世の人よりも人の問ぬやつこの身まてかへりきて
それと又時雨をとり絶つめしと祝ぎ給へ大和ことの葉

甘露　享保十四庚戌年の頃

これもとぬ寄院作のたまもこちや先きぬあり例に
百年にならむとひきて今見ることも世に出ぬ宮のれなる云

日十七十月又降

去年仲冬降星瑞今歳再示祥況是神祠南北樹喜看甘露更濃々

洞の中にとめし我世を仙人のなきへてふるさとにわするゝや絶ん

旋頭歌

同十六降　御製詩歌

再三甘露降喜睍寶從天將數多篇詠禎祥貽萬年

ことせまて松のとぬ庭や宮やまた深き露寄せぬその葉

寛文二年二月十二日和歌御会　故院御代始　初度
同年二月廿二日水無瀬御法楽　東宮十歳
　廿四日聖廟御法楽　初度
同八年迄享保十八年和哥当座御会二百余度御法楽五千余
　内侍所自貞享三年
太神宮元禄十四年
聖廟自貞享四年六月迄元禄三年
玉津嶋自元禄三年六月迄六年六月
住吉稲荷同元禄十五年六月迄宝永三年七月
松尾平野自宝永二年六月迄同五年
祇園貴船自宝永六年六月迄正徳元年六月

御霊并御影同正徳元年六月廿日　四年六月
吉田多武峯同正徳四年六月廿日　享保二年七月
日吉多賀同享保二年六月廿日　七年五月
愛宕赤山同享保七年六月廿日　年七月
六月廿日　十一年七月　　右見廻橋廊廻柳原同享保八年
貞享四年到享保十一年四十箇所年同十一年七月以後二十四箇所而死月く
御法楽同享保十一年到同十二年十二月
鞍馬毘沙門天御法楽同享保十二年二月三箇年同十六年正月
荒神御法楽同享保十六年二月同十六年二月同十七年　山崎御
石清水元禄二年十二月七日　御読経春日社元禄十六年十二月六日
聖廟元禄十七年二月廿七日八百年御忌　右見廻橋廊廻柳原御奉納享保八
年三月十八日
御陵昔柳本社享保十二年七月四日　今宮同年同月同日　依
御夢想　見へぬ風てあともなき花丸ちるまへつくまる春代明かの

春日社御法楽元禄元年二月十日　依御忌水無瀬宮御奉納　元禄元年二月廿日水無瀬殿代被献
同下御法楽　松下勅進　御筆于東山院度御当座十度
御筆于禁裡度御当座両度　於東福殿御当座両度　於有栖川殿御当座二ヶ度
於敏法親王院御当座二ヶ度　於梶井宮御会二ヶ度　九ヶ度各御筆之次也
於幡枝円通寺御会二ヶ度　於妙法院細殿御当座一ヶ度
被遣他所　御製
元禄元年春被遣関東　御懐紙　東山院
大樹　綱吉公　六十満寛永二年御懐紙　共土福公七十賀寿元禄四年六月四日御懐紙
道武公七十賀寿元禄二年二月廿四日御短冊　東山院　敬福門院七十満賀御会享保七年
二十首　巻頭式部卿宮被進　春日社御法楽享保十四年二月九日　一条院尊照親王御勧進
慈眼和尚七百年忌享保九年九月廿二日　親王七十賀詠親王御勧進
桂光院七百回忌享保十三年四月十七日式部卿宮御勧進　中宮院享保二十四回忌
享保十六年七月廿七日中務卿親王職仁御勧進

故院御製九（自寛文至享保）以御命ニ序令書連増加而見已後更有書改一帖也
以霊元院宸筆本令校合之

享保十八年十一月六日

左近衛中将藤為村

這御製集者左近衛中将為村朝臣秘蔵、借請遂書写畢

享保十九年十月上旬

正三位　廣實積